
魔法先生ネギま！薬味先生の友達は転生者！？

ジークフリート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！薬味先生の友達は転生者！？

【Nコード】

N7865Q

【作者名】

ジークフリート

【あらすじ】

天使の間違いで死んだ主人公。だが能力を貰い、二度目の生きる権利を与えられ、別世界に飛ぶ！

第一話 転生へ不幸（前書き）

ネギまでケルベロスの大幅改変した話です。
能力とかは前と変わりません。

第一話 転生へ不幸

遙か彼方、死者だけが行けるといふ世界、天界。空想の生物、『天使』や『神』が存在していた。

「あーああー…暇だなー…」

「黙って書類に判子を押して下さい。」

書類には人の写真や名前などが書かれており、判を押された書類には『死亡』と書かれていた

「今年人死にすぎだろ…」

「仕方がないですよ、事故やら飲酒運転やら、病気とかが流行ってるんですしね」

「メンドクせえー…ふあああ…」

そして事件は起きた。

「あつちよ、それちがつ」

「へ？…あ…」

そこには、高校生くらい青年の写真が貼られた書類に『死亡』と赤い判を押されていた。

これは、天使達のミスにより死んだ青年のお話。

サイド 主人公

X月X日、俺は死んだ。

どうやって死んだのか…覚えていない。

だが分かるのは、意識を失う前に感じた衝撃、後から襲いかかる激

痛。

体から赤く、生温い液体が流れ。

視界が暗く、体が寒く、睡魔に身を任せ、誰かの叫びとサイレンの音をBGMに眠る。

あの感覚が『死』なのかは定かではないが、今気になるのは…

「すみませんでした！」

天使っぽいコスプレをしている二人に土下座されていた。

何故こうなった…

「ホントすみません！許して下さいマジで！ほら、貴方も謝って！」

「サーセンシター」

「ちゃんと謝れ！」

話が分からない、つか誰この二人。

「あのー許すって何ですか？」

「え…？あのその…貴方が死んだのは…私たちのせいなんです！
！」

え？死んだのはアンタ等のせい…？

「えーと、まあこれみろや。」

金髪のやる気のなさそうな顔をした男から紙を受け取った。

その紙に、俺の個人情報がずらりと並び、赤い文字で『死亡』と書かれていた。

「生きていたアンタの書類に、死亡と書かれた判子を押した。それでアンタは死んだんだ。」

なるほど…ちよっと変わったデ。ノートのな？いや違うか…

「それでだ、まだ死ななかつた筈のアンタをこれからどうするか、それを検討中なんだ」

多分そろそろ結果が来るはずだぜ、とおどけながら説明してくれた。

「結果が来るまで何をしていればいい？」

「ああ…くつろいでいてくれ、何も無い所だな。」

と言いつ、壁に背を預けて目を瞑った金髪。

くつろげていわれてもな…

と言いつつも俺も壁に背を預け座りつつ眼を瞑る。

後一人居た天使はオロオロしたとかしてないとか。

――数分後――

ZZZ

「…………ろ…お…っ」

ZZ…ん？

「起きろっておい！」

…んあ、いつの間にか眠ってしまっていたか。

「なかなか起きませんね…」

「トンカチ持ってこい。」

「残念、もう起きてるよ。」

金髪が危ないことをする前に覚醒する。

「結果が出たぜ。内容は…別世界にて二度目の生を与える。だと」

別世界か…なんとも…

「元の世界じゃダメなのか？」

「貴方は死んだことになってますよ？元の世界で生き返ったらゾンビ扱いですね。」

「つか、火葬されたし体ねえよおまえ。」
なるほど、分かった。

「別世界とはどう言うところだ？」

「あー俺らもイマイチわかんねーんだ…けど念のため力をやるからよ。何でもいいぜ。」

得意げな顔でしゃべる金髪、ふむ。

これといって…あああった。

「^{トレース}投影…」

「トレース？…ああ、あの弓兵のか？」

「ああ…それだ」

あの本を見て一番カッコいいと思った力だ。

「OK、わかった。…後、あっちの世界は確か…子供が教師だったな。」

「……子供が…教師？……」
死亡フラグが多いあの世界か…

俺達は今、『世界門』と言う扉の前にいる。

「よし、準備は整った。…」

「色々ありがとう、助かった」

俺は感謝の思いと共に手を伸ばす

「…おう、気をつけてな。」

彼はそっけなくだがその手を掴んだ。…そういえば

「名前を聞いていなかったな…教えてくれ」

名を聞いてなかった、ずっと金髪と呼んでいたからな。

「あーそうだな、俺は『ミカエル』よろしくな。ダチ公」

ミカエル…ダチ公…

「ダチか…ああ、じゃあ行ってくる。」

そして俺は扉に手をかけ、勢いよく開けはなった。

――――

「オギヤー！（何…だと…）」

気がつけば俺は赤ん坊の姿で、ひげ面のおっさんに持ち抱えられてた。

「おおどうしたヴィンセント、お腹が空いたか？それともおしめか？」

「アブブー（あんたは誰だ…ヴィンセントとは誰だ。）」

「おしめか？そーかそーか、待ってる、今変えてやるからのー。」
「言い俺を下ろしてズボンを脱がそうとってうおい！！」

「オギヤアア！！（ちよつ待てオイ！はやまるなっ！！）」

はたして少年は生き残れるでしょうか。

「オギヤアアアアア！！」

（アッーーーー！！！！）

第一話 転生へ不幸（後書き）

ありがとうございました。

グダグダすねw

第二話 日常へ厄日（前書き）

ネカネの喋り方を教えてください。

第二話 日常へ厄日

サイド ヴィンセント

俺がこの世界に来てはや二年。

長いようで短かった…地獄の日々。

そのへんは省略させてもらう。

何故自分から恥ずかしい過去を語らなければならん。精神的にヤバいわ！

まあいろいろあつて今は二歳なのだが「ヴィン、飯だぞ！」かぶせないでくれ父よ。

うーん…食事してる間に家族構成を言っておこう。

今更ながら、俺の今の名前はヴィンセント・セルフィア。

家には父、俺の二人暮らし。

母は俺を産み、すぐに他界。

俺は父の手により育てられた…

父の仕事はこの村を守る騎士、なので帰りが遅い時があるのだが…

俺にとっては都合が良い。

父が居ない間に能力を試したりしている。

最近投影したのは…エクスカリバー約束された勝利の剣だが…

突然変異か、俺のミスか、神の悪ふざけか…

黄金色の筈が抹茶色の剣が作られた。

何故抹茶色に…本物に申し訳なくてすぐに消したが、使うときがあるかもしれない。

ちなみに名前を付けた。

まっちゃんちゃカリバー（笑）

ネーミングセンスが悪いのは気にしないでくれ。

食事が終わり、父は仕事に出かけた。

それを俺は見送り行ったことを確認すると扉を閉めた。

――――

さて…どうするかな？

今回は少しレベルを上げて、射殺す百頭ナインライフスを作るか…
静かに目を閉じ、深呼吸をする。

スウー…フウー…よし。

「投影・開始。」

突然、両手に重みが掛かった。

成功か！期待を胸に目を開けたが…

大きな斧…ではなく、手には赤い弓兵が何時も使っていた夫婦剣が握られていた。

「はあ…なんでさ…」

思わず呟いてしまう、が何時までも落ち込んで居られない。

30分が経過したが、未だに彼の武器は作れない。
今の俺じゃダメなのか？

それと分かったことが一つ。

Fateの宝具のほか、別の漫画の武器を作することに成功した。

漫画だけではなく、ゲームの武器もだ。

これは大きな収穫だ。

一人ニヤニヤしていると扉をノックする音と人の声が聞こえた。

コンコン

「すみません。」

な…来客だと…！？

自分の周りを見渡した。

そこには無限の剣製よろしく、作ってきた剣や槍などが散らばっていた。

まずいなんとかしないて「すみませーん。」やべ、早くしないと。

俺は頭の中で消えろ！！と念じた瞬間、散らばっていた武器たちが一瞬で消えた。

よし、完璧だ！

コンコン

「誰か居ませんか？ヴィンセントくん？」

「はいはいはい！今開けますよー！」

ガチャ。

扉を開けた先には、金髪の二十歳くらいの女性がいたが…

誰だこの人は？父の知り合い…か…

というか何故俺の名を知っているんだ？

「貴方がヴィンセント君？」

「あー…はい、そうですが、父の知り合いで？」

「ええ、少しね。それで貴方に頼みが会ってきたの。」

頼み？それは一体？

「会ってほしい子が居てね、ネギー！」

葱？…ネギー…ネつまさか！？

少し離れた木からひよこつと顔を出してきた少年が居た。

赤髪…ネギー…間違いなく主人公だ。

トラブルメーカー
災厄を呼ぶ者だ。

じゃあこの女性は、ネカネさんか？

「あの…えっと…」

ぬ？いつの間にかネギー（仮）が目の前にいてネカネ（仮）さんがネギーの後ろにいた。

……ほんの小さくだが「がんばってネギー！」と聞こえたが……

「えっと…んと…」

何時までも口ごもるネギー。

…少し手伝ってみるか。

「ヴィンセント・セルフイアです…よろしく。」

こちらから自己紹介した途端、ネギーの顔が明るくなり始めた。そして

「ネギー・スプリングフィールドです！よろしくね！」

やっぱりネギーでしたー。

となると後ろの人はやっぱりネカネさんか。

「実はね、貴方のお父さんに、貴方の話を聞いていて頼まれたの。」

「息子は家にこもってばっかで、外では遊ばなくてな。友達なんて者はいないんだ。頼む！ネ力ネちゃん！ネギ君を息子の友達にさせてやってくれ！」って頼まれちゃったの。」

父よおおおおおおおおお！！？

要らないことをしてくれたな！！

俺は修行をしていただけなのに！！

「えっと…ともだちになつてください！」

とちよつと不安げな顔をするネギ。

やめろ…そんな顔をされたら断れなくなる…！

「…………こちらこそ、よろしく」

「うん！！」

結局の所負けました。

ネギの不安気な顔が先ほどよりも明るい顔になっていた。

「それじゃああそぼっ！」

「彘？今から！？」

「うん！！」

腕を捕まれ、外に出された。

こんなに活発的だったっけ？

これが俺と主人公の出会いだった。

第二話 日常へ厄日（後書き）

次回はネギ目線で行きます。
多分短いです。

第三話 日常へ厄日 2 (前書き)

お久しぶりです。

今回は…まあ…すいません。

スランプったんです。

1ページとか…ふざけてる…

第三話 日常へ厄日 2

サイド ヴィンセント

やほー、ヴィンセントだ。

久しぶりだな、駄作者がこれをほったらかゲフンゲフン。

失礼、忘れてくれ。

俺は今、自室で剣を作ってる。

前にF a t eシリーズ以外の剣を作れると言った。

試しに始解の斬月を作ってみたが、出来た。

出来たときは興奮したね、うん。

剣を掲げながら「やったどおおお!!」て叫んで…
今考えたら不審者でしょ。

「ヴィンセントー、朝飯だー」

「いまいくー!!」

つと、親父が呼んでる。

斬月を消して、親父の元に行く。

「なあヴィンセント、お前部屋で何時も何やってるんだ?」
部屋で何を?

食事中に親父の何気ない質問。

「突然だな。」

「いや、お前部屋にずーっと居るし…家から出ねーしよあ。」

だからなんだ、俺はこの先に待つ悪魔襲撃にむけて修行をしているのだ。

「外に行っても何もないからな、一人で過ごしたい。」

「友達は居ないのか？」

「あー…いな「ヴィン君あそぼー！」い…」

ネギ…お前ってやつは…

「おっいるじゃないか！」

「あー…うん、そだね…」

ちくしょー…恨むぞ、ネギ。

「来たわね！」

ネギが俺の腕を引っ張り、連れてきた先に待っていた人物。

赤髪のジャイアン、アンナ・ココロウアが腕を組んで待っていた。

「赤髪のジャイアンってなによ!？」

「まあ落ち着け、タケシ・ココロウア。」

「アンナよ!！」

「落ち着いてよアーニャ！」

ネギの一声にて、アーニャの暴走は止まった。
さすがネギ、手綱はしっかり握つとけよ。

「それで、何する？」

「決まっていなかったのか…」

「うん！」

「何をやるか…か…」

「…帰るか！」

「待ちなさい！アンタも一緒に考えてよ！」

「考える？ハッ！」

「誰がやるか！！」

「さらばじゃ！」

「コラアアア！！！」

「二人ともまってー！」

「俺が逃げ出せばアーニヤが追う。」

「それをネギが、ついてくる。」

「毎日そんな感じだ。」

「この日常が最近楽しく感じる。」

「その日常は、すぐに壊された。」

第三話 日常へ厄日 2 (後書き)

イエ
イ!

第四話 悪魔へ仮面を捨てる《（前書き）

前作で出したガリアンビーストを出します。

第四話 悪魔へ仮面を捨てる

――チツ。

町の中での異変、平和だった町が一瞬にして地獄と化した。

「たっ…助けてええええ!!」

その叫びは、誰に向けたのか。
俺か？他の誰かか？

それを無視するかのように人々は逃げ出す。
助けを求めた男は、石化した。

――この異変の元凶は

―ズドン―

突如俺の前に降ってきた異形。

―悪魔―

『フム、小僧。何故逃げない？』

突然現れて突然の質問。

普通の奴なら当然逃げ出さだろう。

――だが。

「……おい…お前…」

『又？』

退けない理由がある。

俺と毎日のように行動を共にしてきた。

「…………邪魔だ…………殺すぞ…………！！」

————ネギの為に…！

————数時間前————

ふう…つかれた…

俺ことヴィンセントは今、森の中で修行中だ。

修行、といっても集中していつもの投影ぐらいな物だ。

最近じゃあネギと一緒に居たからな、余りやる時間が無かったから。
今ここでやって居たわけだが…

「さつてと…………帰るかな…ッ！？」
ッ！？

微かに焦げ臭い…村から煙が！！

そんな！もうそんな時期だったのか！？

俺はその場から走り出した。

チッ、ネギは無事なのか！？

来ることは分かっていたのに…それを防げないなんて…ッ！
クソッ！！！！待ってる！

『おい！おい！！』

何処からか声が…

前に聞こえた声だ、俺は立ち止まり周囲を確認する。

気配は感じられない…何処に？

『お前の頭に直接話しかけてんだ、見えるわけねーよ。』

『ミカエルか、久しぶりだな。』

『おう、だが急いでんだろ？走りながら聞きな。』
『そうだった！』

再び町に一直線に走り出す。

草木が道を遮ったり、走りにくい。

『いいか、よく聞け。今のお前じゃまず、悪魔に勝てない。』

『何故だ！俺は何度も修行を！』

『贋作つくってただけだろーが、作るだけなら馬鹿でもできる。問
題は経験だ』

『ラカンだって経験と努力であんなバグになったんだぞ？』

『あんなのと一緒にするな！』

『そうかい、んで神様からの提案だ。』
なに、提案？

つとー！転びそうになった！

『あつちに行っても負けるだけだ、やられたらここに連れてきた意
味がねえ。』

『だから神様は、お前に死なれないようもう一つ力を与えるらしい。』
『

力？いったいなんの？』

『さあねえ、俺は知らされてねえ。けど渡されたときはかなりイテ
エらしいから気いつけな。』

「ありがとう、ミカエル。」
『おう…死ぬなよ』

ミカエルとの念話を切り、町の中に入ってしまった。

――――――――――

中に入ってから見たのは石化した人たち。
知っている人だ…

恐怖に染まった顔だ。

クソッ…

――ああ…

声！！まだ生存者が！？

声のする方へ、走り出した。

「たっ… たすけてえええ！！」
地に伏せた男が叫ぶ。

その男の周りを、逃がさないと言わんばかりに囲んでいた。

「… 投影・開始…^{トレス・オン}…！」

両手に持つは、白と黒の夫婦剣。

それを奴等の顔めかけ投げ飛ばす。

少し雑な投げ方をし、軌道がずれたが。
やつらの頭に突き刺さった。

俺はすぐに助けを求めた男に駆け寄った。

「おい！大丈夫…か…」

声を掛けようとした時には、男は石化していた。

助けに来るのが遅かった…

ネギは…？

「…ネギ…捜さねーと！」

無事でいてくれ…

ー冒頭に戻るー

悪魔風情が…調子に乗りやがって…

「どけよ、テメーに用はねえ。」

『君に無くても私にはあるのだ。石化しなさい。』

訳がわからん。

「石化しなさいじゃねーよ。」

俺はまた夫婦剣を作り、切りかかった。

相手は腕を大きく振りかぶり、俺に拳を振り落とす。

それを跳躍して回避、そのまま奴にめがけ、剣を投げる。

ドスッ！

またしても投げ飛ばし方が雑で、頭を狙う筈が肩に刺さった。

因みに干渉だけ、莫耶は奴の足元に。

………修行だな、うん。

まあ結果的には良しだ。

そのまま、奴から少し距離をとり手を奴に向ける。

『なんの真似だ？』

その問いに答えることは無い。お前はここで消える。

ブロックンファンタズム
「壊れた幻想！」

そのまま指を鳴らし、干渉・莫耶を爆破する。

風圧が砂埃や塵を吹き飛ばす。

……やったか？

『ーウム、良い攻撃だが』

ーーッ！？

後ろからさつき爆発したはずの悪魔が立っていた。

不味い…

奴は腕を振り上げ、攻撃体制になっていた。

『甘すぎる』

無情にも、拳は振り落とされた。

ガン！

………おかしい、一向に痛みがない。

「うおおおおあああああ！！！」

『何！？』

この声…父さん？

「この子に…ヴィンセントに手を出すなああああああ！！！」

『ぐおお！？』

悪魔を蹴り上げ、落ちてくる瞬間に殴り飛ばす。

これほどまでに強い父親だったとは。

俺に背を向ける父の背中に少し、憧れてしまった。

…ほんの少し……ええ…人間かコイツ？て思ってしまった…

「無事か、ヴィン！？」

振り向く父の顔は…

涙や鼻水でグシャグシャな顔だった。

五行前の台詞、撤回してくれ。

てか、親父顔近い！キモ！

「大丈夫だよな？怪我無いよな？無事だよなあああ！？」

「だあああああ！！離れるバカアアア！」

「うっ…つれない息子だ…最後なんだから素直になっても…」
「いい座り込む親父…ん？」

最後？なんの事だ？

「親父…最後っ…ッ！？」

親父の左腕が石化していた。

しかも止まることもなく、侵食していく。

何故？何時だ？何時やられた？

「あちゃー…父さんもう駄目だ。」

「…なんで冷静に言っただ！」

「俺は石化を治す事は出来ん、もちろんお前もだろ？」

「わかってる…でも！」

諦めちゃ…駄目だろ…

どんどん親父の体が石化していく。

「良いから聞け、ヴィンセント。お前は周りの子供達より頭は回
し、冷静だ。」

「けどな、護りたいものがあるなら…狂え。その冷静な仮面を脱ぎ
捨てろ。」

「護るために…狂うことを躊躇うな…父の遺言だ……………」

そうして、親父の声が消えた。

ちくしょう…どうして…

その時

『悲しむのは良いが…よそ見をしていて良いのかな？』
親父にやられたはずの悪魔が、俺の後ろに立っていた。
そして、悪魔の拳が、俺に当たる。

ー ドゴッ！ー

「グフッ！」

吹き飛び、建物にぶつかった。

「グッ…ゴブッ！」

体全体に痛みがつたわり、血を吐き出した。

血が黒い…内蔵をやられたか…

体が動かない…限界か…けど。

『ム？』

「う…ぐう…」

震える体を動かし…といつても、顔しか動かせないが…

顔だけを奴に向けて、睨む。

『ほう…負けると思った目でもない…諦めた目もしていない…勝てると思っっているのか？』

当たり前だろ…ネギを探さなきゃ…ならないんだ！

――――

「ミカエル、彼…やられそうよ？」

白い世界に、二人の男女が座っていた。

「いんや、あいつはやられねー」

「どうして？」

ミカエルは小さく笑い、女に言う。

「オレのダチだぜ？んでもって、あいつに力をあたえたんだからよ
！」

――――

グウ！？なんだ！

体が…引き裂かれるぐらいに激痛が！！

ミカエルの言っていた力か！？

油断したら意識が飛びそうなくらいの痛みが、体を走る。
やがて…視界が暗くなり、目を瞑った。

――――

ここは…

再び眼を開ければ何も無い、真っ黒な世界だ。

俺は…さっきまで倒れて…

――力が欲しいか――

どこからか声が響いた。

不思議な事に俺は、その声に警戒をしなかった。

――力が欲しいか――

力が欲しい？当たり前だ。

あんな所で死ぬわけにはいかない。

――ならば狂え――

狂う？はは…親父も言っていたな…

『護るために、狂うことを躊躇うな。』

だっ たな……

——狂え——

狂え… か…

そうすれば… 護れるか？

——そうだ——

ああ… 良いぜ…

護れるなら、狂ってやるさ。

——よかろう、汝に力を授けん——

——————

気がついたら、さっきと同じ。

地に伏せてる俺と、見下す悪魔。
体に痛みがない…

俺は、ゆっくりと体を起こす。

『ぬう？なにを…！？』

悪魔の声が、驚きに変わる。

俺の立っている中心から黒い魔力が吹き出す。

『なんだ…なんだそれは！』

驚くのも無理はない。

俺も驚いているから。
そのまま俺を包み込む漆黒。

ーピシッー

ヴィンセントが漆黒の魔力に包み込まれ、数秒。
包み込んでいた漆黒は、亀裂を作る。

ーガシャンーー

漆黒の硝子が割れ、腕が飛び出した。
だがおかしい、その腕は、明らかに。

人の腕では無かった（・・・・・・）
いうなればその腕は、けもの獣

先ほどの、か細い腕ではなく、毛だらけに。
そして、鋭利な爪。

ーガシャアアアンー

硝子が飛び散る音とともに、姿を表した。

「■■■■ー！！！」

雄叫び。

聞けば誰もが身震いするほどの雄叫びを上げた。
そしてその姿。

狼の様な顔に、左腕に銀色のガントレット。

両足は銀色のブーツ、体全体が灰色の毛。

そう、彼は化け物モンスターになったのだ。

「人間が、モンスターの真似ごとか…」

悪魔は、忌々しげに喋る。

だが悪魔は気づく、目の前にいたはずの獣が消えた。

だが場所はずくに分かった。

視界の端に、毛がみえた。

そして

『ゴッ…！？』

「■■■■■■—————！！！」

懐に入られた、そう悪魔が思考したときは全て終わっていた。

この瞬間。悪魔の敗北が、確定した。

はあ…はあ…はあ…

勝てた…何とか…勝てた…

体が震える。

俺は…化け物になったのか？

だが、考えてもしかたない。

ネギを探そう。

「ネギー！おおい！」

あれから数分経つがネギは見つからない。

もしかしたら先に出たのかもしれない。

そして。

ードゴオオオンー

「ぐあああ！」

横から大きな爆発が起き、俺は壁を突き抜けて民家に入った。

「ぐえ！…てえ…ぐお！？」

そのまま本棚に衝突。

本が崩れ落ち、頭に降り注ぐ。

効果音を付けるならこう…スココーンと…

「うぐ…不幸だと言っておくか。」

と立ち上がるときに、ある本が手に当たる。

そして。

『封印を解除します。』

機械音が部屋に響く。

は？封印？なにが！？

とてつもなくイヤな予感するんだけど！！

手元にあつた十字架っぽいのが付いてる本が、俺の目の前に浮かぶ。

『起動』

慌てる俺をよそに、喋り続ける本。

そして光を発し始めた。

その時間僅か数秒。

そして、目を疑うような光景が目の前に広がっていた。

「夜天の書の起動、確認しました。」

「我等夜天の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にございます」

「夜天の主に集いし雲」

「ヴォルケンリッター、何なりとご命令を。」

……

……

…ハッ!?

驚きのあまり放心状態に!!

それより彼女達は何者だ?

町に居たなら顔ぐらい覚えてはいるはず…

それに夜天の書? ……聞き覚えのあるような…

うーん…どうい「あ…」ん? ああ…居たな、確か。

まあとりあえず、聞くか。

「…あんたら誰?」

「守護騎士にございます。」

「いや、それは分かった。…個人の名前は?」

「失礼しました、烈火の将シグナムです。」

ピンクの髪の女性が、膝を付き名乗る。

それに続き、他の三人も膝を突き始める。

「湖の騎士、シャルです。」

「…盾の守護獣、ザフィーラです」

「…鉄槌の騎士、ヴィータ…」

個性豊かな人たちだなー

そう考えてしまった。

だって騎士の内の一人に子供だぞ?

こんな小さい子供が戦うとは…(お前が言うな b y ミカエル)

と、ほんの少し現実から目をそらしたがここで気づいた。

悪魔がまだ彷徨いてるかもしれない、それなのに悠長に話していて

は不味いだろ。

ゆっくりと立ち上がり、目の前の方達に状況を説明しようとした。

――その時――

――ズドン――

嗚呼、俺は本当に運がないのか？

悪魔が、この民家の入り口（俺が入ってきた穴）に落ちてきた。

「チツ……来たか……」

「主、あれは一体？」

ピンクの髪的女性（たしか…シグナムさん？）が聞いてくる。

「主って言うのやめてくれ、…あれは…ここを襲った元凶だ。」

「てことは…あたしらの敵か？」

「…そういうことになるな…。」

子供と筋肉質の男性が話す。

まさかアレと戦うのか？

「主はここに、我々はあの異形をの相手をします。」

「なっ…無茶だ！」

「我ら守護騎士は、主をお守りするために居るのです…シャル！
主を治療してくれ」

「わかったわ」

勝手に話を進めるな。

そう言おうとしても声が出なかった…

ここにきて体力が…尽きるとは…

「大丈夫ですよ、眠っても。」

金髪の人の声を聞き、重い瞼を閉じる。
そして…ある事を二つ思い出す。

ネギのこと…そして…

彼女達は確か リリカルな世界の…

――― 続く

第四話 悪魔へ仮面を捨てる（後書き）

もしも、ヴィンセントが石化したら。（天使目線）

「あっちゃー…やられやがったよ…」

白い空間に、イスに座りながら呟く男。

その手には、一冊の本があった。

「……………まあいいか、それまでの奴だったって事が…」

「まったく…さあて、仕事仕事！」

手に持っていた本を乱暴に投げ捨てる。

バサツと落ちた本にはこう書いてあった。

ヴィンセント・セルフフィアの生涯

はいっ終了ー！

説明会しまーす！

まず始めにビースト化ですが。

悪魔との戦闘描写で素早く懐に入り、倒しましたが。

FF7ではビーストはあれです。

かなり強いんですよ、バーサクダンスやらビーストフレアやら。フレアをだして終了ーというのもまあ良いかなと思いましたが。考えたんですよ。

デスギガスを破壊にして、ガリアンビーストを俊敏にしたら…と。

だからあの倒しかたにしました。

次に夜天の書についてです。

最初は闇の書でも良いかな？と思ったんですが…

ほら、アルカンシエルやら白い悪魔さんもないじゃないっすか？

ネギまの世界でプログラムと戦っても負けるな！…

そう考え、欠陥品になる前の夜天の書にしました。

質問ある方は言うてください。

第五話 夢 へ目覚めへ（前書き）

ふむ、この調子で更新していききたいものです。

第五話 夢 へ目覚めへ

.....

.....

.....

...

「主。」

.....ん.....？

「主よ。」

.....誰だ.....？

「主よ、起きてくだされ。」

...誰かが呼んでる？

「主？そろそろ起きてくだされ。」

ああ俺...寝ているのか、なら起きなければ。

重い瞼を開け、状況確認する。
始めに視界に移ったのは青空。
雲も少しもない…綺麗な青空だった。

「やっと起きましたか。」

ああ…忘れとつたわ…

未だ重たい体を起こす…

「あー…」

「なんですか？」

起きたら目の前に…めっちゃ真つ白な狼がこちらを見ていた。

「あの…俺を起こしたのは…アンタか？」

「いかにも、中々起きぬから心配したぞ。」

と、一步一步近づいてくる狼さん

そして少しずつ離れる俺。

この状況を知らない人が見たら狼に襲われそうな人だろう。

「なぜ離れる。」

「いやまだ状況を把握しきれていなくて、ここは…」

「ここは主の夢の世界だぞ。」

あー夢ね…うん…夢でよかった。

まあそんなことよりだ…

「アンタはなんだ？」

「我は主の力、そのもの…覚えとるか？主が悪魔と戦った時を。」

俺はその言葉に首を縦に振る。

ああ、覚えているさ…忘れることは出来ないさ。

「主のビースト化…それが我だ。」

「お前が…？」

「そうじゃ…と…そろそろ夢から覚めるの…」

「ちよ、まだ聞き足りないんだけど！？」

「問題ない、我と話したいなら…目が覚めれば手に持っている物を握る。」

「物？なんだっ…あれ…これって…！？」

体が急に重くなった、まるで岩でも背負わされたようだ。

そして一気に意識を刈り取られる。

気を失うほんの瞬間、俺が見た最後の光景は…

野菜を食べていた狼だった。

ちよっおま…

目が覚めた…先ほどの景色とは違い、室内だ。
見知らぬ天井を数秒見つめ、一言。

「アイツ…ベジタリアンかよ……」

自分の声が、虚しく響く

「起きたんですね？」

「！？…え？」

突然声が聞こえ、少し驚いたが、声の主は聞き覚えのある人物だっ

た。

「…？」

シグナムさんだ。

「他の人は…？」

そう、彼女以外にも居たはずだ。

確か…ヴィータと…シャル？さんと…後…ああ！ザフィーラさん！

その三人が居ないんだ。

「ああ…こちらに。」

と、指を指す。

その方向に…青い狼と、イスに座りながら眠りにつく二人が居た。

「主、もう少しお休みになられては？まだ日はあがってはいません。」

「

と休むことを進めるシグナムさん。

窓の外を見ると…まだ暗い夜だった。

確かにまだ疲れは残っている…ここはお言葉に甘えとしよう。

「ああ…そうするよ…アンタは寝なくて良いのか？」

「私はこのまま起きて見張りを。」

凜とした声で、こちらの眼を見つめて喋るシグナムさん。

見張りつて…物騒な…

けど真剣な空気纏ってるし…マジでやるんだろうな…

なら俺は口を出すわけには行かない。

「分かった…無理はするなよ？眠いときに眠ればいいんだから。」

「！……心遣い有り難う御座います…では、おやすみなさい。」

その言葉を聞き、起こしていた体を横にし、目をつぶる。

「……有り難う御座います……」

あ、手元見るの忘れた。

第五話 夢 へ目覚めへ（後書き）

感想が俺の動力源。

第六話 再会へ安心《（前書き）

ネ力ネの喋りかた教えてくれええええ！！

第六話 再会へ安心

あ

またしても夢の中…

先ほどとは違い、草原ではなく、周りには建物ばかりの摩天楼。天を突き刺すかの様に立ちそびえている。そして重力無視で建物の壁に立つ俺と…

「ようー！」

天使のミカエルだ。

「ミカエル…どうした？」

「あー、お前にな、言わなきゃなんねえ事があるだよ。」

言わなきゃならないことは…

多分、あの事だろう。

「えー、お前に渡した能力の説明についてだ。

あの時お前が変身した姿が、『ガリアンビースト』って言ってな、FF7のリミット技でもある。」

「ああ、知っているぞ。」

ミカエルは一步步近づき、説明する。

「んで、ビースト以外にも後三つは変身出来るが…今のお前じゃなれんな。

経験と場数が足りない」

経験か…

コツコツと足を鳴らし歩く。

そして俺の目の前に立ち、笑顔で話す。

「まあ、一つは使えたんだ。お前ならいけるさ。」
と、俺の肩を叩く。

それと同時に、一瞬で俺は意識を失った。

ヴィンセントが消え、摩天楼にはポツポツと雨が降っていた。
その中でミカエルは一人、雨にうたれていた。

「……聞け、ヴィンセント……」

小さな声で、呟く。

誰にも聞かれないような声で、呟く。

「いよいよ物語が始まる……悠長にはしてられないぞ。
気張っていけよ……」

心配するかのように喋り、顔を空に向ける。

その顔は、何処か、嬉しそうな顔をしていた。

雨は未だに降り注ぐ

サイド ヴィンセント

俺の中に眠る力は後、三つ残っている…か…

眠りから醒め、重い瞼をあける。

余り体は動かないから、目だけを泳がせた。

窓からは暖かい日の光が入り込んでいた。

「朝か…」

ゆっくりと体を起こし、左手を見る。

そこには、狼のネックレスが俺の手に握られていた。

「これが…」

ピシッ

「あれ？」

まじまじと見ていると、ネックレスにヒビが入り、砕け散った。
…俺は何もしてはいないぞ。

『元から砕ける仕組みだ、何も問題はない。』

頭に直接響いてくる謎の声。

まああの狼の声なのだな。

『主が出ると願えば出てくる。消えろと願えば消える。』

そのネックレスの名は、『俊敏の証』じゃ。忘れるでないぞ？
それを使えば主はビースト化出来るじゃろう。』

俊敏の証、それがあのネックレスの名前らしい。

…些か痛い名前だな…

『やかましい、作者も脳ではこれが限界なのじゃ！』

ちょ、その発言は色々と危ないぞ！？

『知らんわ、じゃあ切るぞ？人参を食いたいのだな。』
と、強引に切った狼。

……あの姿で野菜食うなよ……

ふと思った…シグナムさん達が居ない。

「…と…さ…」

「…き…む…」

ん？なんだ、部屋の外が騒がしいな…

俺はベットから降り、駆け足でドアへ向かい、開ける。
そこには…

守護騎士さんとネカネさん、ネギとアーニヤが
向かい合って口論していた。

ネカネ「無事かどうかだけ確かめさせて下さい！」
シグナム「主は眠っている、また後にしてくれ。」
アーニヤ「アンタらは誰なのよ！？」
ネギ「アーニヤ落ち着いてよ…」

………カオス………

「あ…ヴィン君！」

ネギが俺に気づき、指を指しながら叫ぶ。

その叫びにより、他の叫んでいた方々はこっちに顔を向けていた。
………やってくれたな…災厄を呼ぶ者の名は伊達^{トランメルメーカ}ではないか…

――数十分後――

…さてさて…

あれからまたドンパチありましたよ。

ネギは半泣きで俺に抱きついてきて、

アーニヤは俺に近づき、「元気じゃない、心配してそんした!」と涙目でどついてきたり、

ネカネさんはポロポロと涙を流して「良かった」と泣いて、シグナムさん達はまあ空気を讀んだのかあえて喋らなかった。

そして今、俺は再度ベットに戻され説明する事になった。

ネカネさんが顔を近づけ、小声で話す。

「ねえヴィン君。あの人達は誰なの?」

誰…かあ…

まあリリカルな世界のキャラだが…詳しくは知らないのだ。なんとも…説明しづらい…

「あー…親戚ですね、はい。」

一応それで乗り切ることにした。

その後、体の調子を確認したら快調そのものであり。

明日には退院出来るとの事。

それを聞いたネギ達は大喜びだった。

…まあ俺も喜んだが。

日も落ち始め、彼女達は帰っていった。

（ここに残るとこねたがシグナムさん達の睨みにより、足早に帰った。）

さて、これからのことを考えよう。

住む場所と、彼女達の服、だな。

服は…ネカネさんに頼むか、ヴィータには…投影で作れるかな？

トリス・オン
「投影・開始…」

右手にパサリと布が落ちる、そこには。

うさぎの書かれていた服があつた。

おお、成功か！ならシグナムさん達にも作れるな。

そんな事を思いながら彼女達をみる。

イスに座りながら寄り添い合い眠る三人と、その足元で眠る狼。

俺は彼女達に毛布を投影し、それぞれに掛けて。

眠くなるまで彼女達の服を作ることにした。

――続く

第六話 再会へ安心》（後書き）

次は主人公のステータスです。

ステータス（前書き）

見づらいです

ステータス

名前 ヴィンセント・セルフィア

年齢 ネギと同じ

容姿 蒼色の瞳で髪型はクラウドと同じ、色は漆黒
何時か挿絵でも書きたい。

クラス ????

ステータス

筋力 C 魔力 C+

俊敏 C 耐久 D+

幸運 D

ガリアンビースト

ステータス

筋力 B++ 魔力 D

俊敏 EX 耐久 C

幸運 D

必殺技

バーサクダンス
ビーストフレア

持ち物

俊敏の証

ガリアンビーストになるためのアイテム。

形状はネックレス。

念じれば出てくる優れ物

変身する際は取り出し、胸に当て、痛い台詞を言う。

台詞募集します。

夜天の書

リリカルな世界の物

欠陥品になる前の奴です。

まっちゃっちゃカリバー（笑）

初めて作った宝具？

セイバーのエクスカリバーが黄金なら。

この宝具？は抹茶色。

使う時はあるのか…作者次第

ステータス（後書き）

えー、変身する時に喋る台詞募集します

番外編 父と息子へスキんシップ《（前書き）

番外編です

番外編 父と息子へスキんシップ

な

ただいま俺は、森の中にいる。

快晴の空の下、俺はとある男に刃を向けていた。

ーギンツガギツ！

これで何度目になるのだろう、剣を交じり合わすのは。
こちらは漆黒の刀、天鎖斬月に対し。
相手は少し汚れの見える一般的なブロードソードだ。

ーガキンツ！

「ふっ！…はあ、ハッあ…！」
こちらは刀を振るう度に体力を消耗。
子供の体だ、体力は少ない。
肩で息をする、相手は疲れた顔をせず、むしろ涼しい顔をしている。

「はあ！」

「ぐあ！？」

ーヒュッキン！

つい手の力を抜き、刀を弾かれる。
空中でクルクルと回り、やがて地面に刺さった。

「どうしたヴィン？この程度か！」
剣の切っ先をこちらに向ける男。

その顔は、笑みを張り付けている。

……っか…

「子供相手に全力でやるなよ、親父。」

「お前こそ、首や心臓狙ってきたじゃないか。」

親父はしゃがみ込んでいる俺を見おろし、喋りかける。

どうしてこうなったかは、数時間前。

――数時間前――

俺は自室に隠り、剣を作っていたときだ。

突然親父がドアを開け、俺に言った。

「お前、剣を習ってみないか？」

最初は断ろうとしたが…強制的に連れてこられ。

気がついたらここで、剣を持って親父の前に立っていた。

そして今に至る。

今は休憩にもらい、木に背を預け、座り込む。
しかし…

「なんでまた突然？」

「いや、お前外出たりするのは稀だろ？体力作りもかねて…

と、お前の実力を試したかったし。」
「実力？それは…」

「気づいてないと思ったか？お前、剣とかいっぱい作ってたろ。」
「気づいていたのか。」

「親父は俺に視線を合わせるようにしゃがみ込む。」

「ありや俺の知らない魔法だ、…どうやってやったかは聞かないよ。ただ…戦ってみて分かった。お前は強くなるぞ、うん。」
「頭をグシャグシャと撫で回す親父。」
「そう言われるとうれしいな。」

「実はな？俺の知り合いに、高畑・Ｔ・タカミチが居てな。」
「へ！？タカミチが知り合いなの！！」

「驚いて親父の顔を見た、その顔は楽しそうな顔をしていた。」

「あいつは今も時々、連絡し合っているよ。」
「なんでも、麻帆良学園ってところで教師やってんだとよ。」

「へえー、と知らないふりをする。」
「本当は知ってます、ごめんなさい。」
「ほんの少し罪悪感が沸き上がりつつ、親父の話を聞く。」

「それでな、手紙渡すときは必ず、『お前』の写真を送ってるんだ。」
「」

「…………俺の、写真？」

「おい、それは…」
「ああ！お前の赤ちゃんの頃の写真やご飯食ってる写真、ネギ君やアーニヤちゃんと遊んでる写真。眠ってる写真や釣りを楽しんでる」

写真とかだな！

今じゃあお前の成長を報告しまくってるよ！」

……… 投影・開始 ……

「確か、ほかの先生方にも見せてるらしい。

いやー、みんな可愛いとか言ってるぞ！」

良かったなーと大笑いする馬鹿を前に俺は、なにも答えない。

―――― 投影、装填 トリガー・オフ

手を掲げ、この馬鹿の口を閉ざすための武器を作る。

「タカミチもお前に会いたがっていた…ぞ…？」

手にちょっとした重みがくる、だが今の俺には軽く思えた。
怒りは力を与えるとは…フッフ。

「ちよっ… ヴインセント… それって… ごめんなさい！」

震えた声で喋る馬鹿、謝ってもゆるるさん。

俺はソレを大きく振り被る。

「全工程投影完了ー！是、射殺す百頭」 セッター・ナインライブスフレイドワークス
「ギヤアアアアアアー！！！」

――後日

『高畑・Ｔ・タカミチへ』

元気か？俺はそこそ元氣だぞ。

最近な、ヴィンの成長に驚いているんだ。

あいつ、俺の知らない魔法を使うんだぞ。

何も無いところから剣を取り出したりしてさ。

んで、あいつの力試しをしたくて、一戦やってみたのよ。

それで分かった…あいつは、今は弱いけど時間が経てばあいつは化ける。

それと、俺が手紙を渡す度に写真を渡している事を教えた。

そしたら凄い血相で襲われてな。

大きな戦斧みたいなのを掲げてたんだ。

凄いだろ？まだ子供なのに身の丈より大きな斧を…

流石、俺の息子！

と、報告はここまでだな。

写真は…甘い物を食べてフニヤ、としてる顔を渡す。
じゃあまたな

アガット・セルファイア』

その写真を見たタカミチ、同僚の魔法生徒・教師達は悶えたという。

（特に刀を持つ女教師や脱げ女、魔眼持ちのスナイパー

幼女吸血鬼などが）

番外編 父と息子へスキんシップ (後書き)

ここで射殺す百頭を使う。

父親の名前を公開…

刀子さん、良いかも。

第七話 増殖& a m p・カレーへ増えた・辛さ（前書き）

リンフォースが登場。
キャラが変です

第七話 増殖 & a m p ; カレーへ増えた・辛さ

「問おう、貴方が、私のマスターか？」

……俺が何をした？

サイド ヴィンセント

夜中に服を作り出していたが、眠気に負けて眠ってしまった訳だが。朝、目を開け体を起こした瞬間。

「問おう、貴方が、私のマスターか？」

朝一番にボケをぶちかます馬鹿が目の前にいました。

それは某運命の夜的なネタだろ、やめてくれ。

とまあいきなりの事で若干混乱してはいるが…

このボケをぶちかましてきた人、シグナム達（さん付けはやめると言われた）

ではないんだ。

銀髪のロング、目が赤い人。

リインフォースですね分かります。

リインフォースは、ネタに反応しないのが不思議だったのか、口を開き。

「問おう、貴方がわち「分かったから、朝一番にボケないでくれ」
…むう、分かりました」

ちょっとふてくされた様に呟くリインフォース。
おい、こんな性格だったか？もうちょい悲壮感漂ってなかったか？

（ああ、それ俺だ。）

このダメ天使は無視しよう。

「アンタは誰？」

一応、聞いてはみる。

確か出てきたときは名前は無かったはず。

「私は、夜天の書の管制人格です。名はありません。」
ほらな、無かつたろ？

（一時間後）

リインフォースの管制人格とかの

説明という名のラリホーを右から左へ受け流し、
名前を与えて、はいおしまいみたいな？

今は着替えをしようとしてるのだが、シグナム達は眠っているから
オーケー、だが

「リインフォース、なにジロジロ見てる。」

「万が一のために、見張りを…」

「ただ着替えるだけで見張りはいらん！」

と、リインフォースに後ろを向かせ着替え始める。
本当に…あんなキャラだったか？

まあそんなこんなあり、俺は退院出来たが。
あ、因みにシグナム達も普通の服きてます。
あのまま外へ出たら寒いしな。
んで、ここからが本題。

住む場所どうするかだ。

ネギ達は一応ある、なんとか学園長だか校長だか知らんが用意したらしい。

ネギ曰く、「ヴィン君は家の隣」だそうだ。

これで住む場所は良いとして。

なかなか快適な場所であつたな。
んで今は。

「なあ、なに考えてんだ？」

と、後ろに控えているヴィータが話しかけてくる。

因みに軽く話してくれと言ったら、ヴィータとシャルがそれに応じた。

え？シグナムとザフィーラとリインフォース？

あの三人は応じてはいない、堅物だからな…一人違うか？

今はシャルとヴィータの二人を連れて買い物に行ってる。

「うん？夕飯の献立を考えてはいたのだが…」

六人分を作るのは初めてだからな、ウーム。

カレーで良いか、サラダ付きで。

「決めた、カレーにする。異論はあるか？」

「カレーかあ…甘口にしてほしいな。」

「ヴィータちゃん子供w」

「んだとシャル！」

「シグナム達の事も考えて…辛口で良いんじゃないですか？」

「無視すんな！」

「ちょ！こんな所で喧嘩すんな！」

しかもちよいどうでも言い話でもめんなよ！？」

辛口は大人の味よと断言するシャル、大人げない。

甘口はヴィンも食べれるように考えてんだと言い返すヴィータ。
俺は辛くても良いのだが。

不毛な争いが五分続き、切りの良いところで俺はある提案をする。

「間を取って中辛はどうだ？」

その台詞を聞き、こちらに顔を向ける二人。

その顔はまるで「それだ！」と言わんばかりの表情だ。

ほんの少し面白い、顔がニヤけてないか心配だ。

そして二人の顔がだんだんと赤くなる。

先ほどの争いがバカらしい事に気づいたか、まあいいや。

「何時までも惚けてないで材料買っぞ。」

と先に歩く俺。

その後ろで待つてよとか言ってるが待たない。

…速度は遅くしてるがな。

ん。後はジャガイモを買っただけ…ってあれ？

ヴィータがいない、先ほどまでは近くにいたのに…

「シャル、ヴィータは？」

「ヴィータちゃんはあそこに……」

と指をさす、その先に居たのだが何かを見ているが……？

………うさぎの人形？

「ヴィータちゃん、あれが欲しいのかしら？」

と首を傾げるシャル。

フムフム、なるほど。

「大人だと本人は言うが、存外まだ子供のようだな。」

「そうですね。」

二人でクスクスと笑う、微笑ましいな。

子を見守る親になった気分だ……親父もこんな気持ちで育ててくれたのかな？

「シャル、俺がヴィータを連れて買い物をする。その内に」

「買ってくれば良いんですね？」

「理解が早くて助かる、頼めるか？」

「まかせてください！泥船に乗ったつもりで居て下さいね？」

うん、沈むな。

心配だなー

さて、買い物も終わり帰路につく途中。

うさぎの人形は買ってあげた……本人に悟られないようにな。

途中シャルがミスしかけてバレそうになったが何とか気づかれず

にすんだ

…確かに泥船に乗った気分だった。

肝心のヴィータは…うむ、は上の空だ。

「ヒソヒソ（ヴィン君、そろそろ）」

「ああ、そうだな…ヴィータ。」

「……………」

うん、聞いてないな。

完全にぼーっとしてる。

「ヴィータちゃん？」

「…え、なんだ？」

「ほら、この袋開けてみる。」

ヴィータに人形の入った袋を渡す。

分からないと言った表情をしつつ、言われたとつりに開け始める。

「……あ。」

袋から取り出されたウサギの人形をみて、明るい笑顔になる。

隣にいるシャルが、気づかれない様に笑う。

確かに、微笑ましいな。

「ヴィンこれ、貰っていいの!？」

やや興奮したように聞いてくる。

「ああ、お前に渡すために買ったんだからな、気に入ってくれたか？」

「うん、ありがとう!!」

ありがとう、か…久しぶりに聞いたような気もするな。

そんな事を考えながらヴィータの頭を撫でる。

「あー、さて。帰って夕飯作らなくちゃ。」

「そうですね、あ！私も手伝いましょう！」

「ん、それは助か「ダメだ！」るって…ヴィータ、どうした？」

焦りの表情を浮かべ、ヴィータは喋る

「シャマルの料理はダメ！アタシらを殺す気か！？」

「ヴィータちゃん！？なに言ってるの！？」

殺す気って…料理で死ぬ分けないだろうに。

「まあ、大げさだな。大丈夫だろ？」

「ほら、大丈夫だって言ってる！」

「いやでも！」

「あー何でも良い！とりあえず帰るぞ！」

話がややこしくなってきたから俺は切り上げ、帰ることにした。

さて、玄関を開けすぐに見えたのが……

シグナム、ザフィーラ、リインフォース。

この三人が片手を顔に当てこちらを見ていた。

ジョジョ立ちかよ、てか、常識あるシグナムとザフィーラまで何やってんだ。

シ（リッ…リインフォース、これで良いのか？）

ザ（主が怪訝な顔をしている。）

リ（問題ない、将よ、もう少し堂々としてくれ。ザフィーラ。それは幻覚だ。）

なるほど、アイツが原因か。

俺はその三人をスルーし、シャルと一緒にカレーを作ろうとしたが
ポーズをとってた三人はそれを見て必死にシャルを止めようとし
ていた。

三人の必死な顔を見たら、手伝って貰うのをやめさせた。

まあそのせいでシャルが部屋の隅で拗ねてたが。

第七話 増殖&mp・カレーへ増えた・辛さ（後書き）

どうしてこうなった

第八話 死の眼鏡へデスメガネ (前書き)

後書きにifな話しを書きました。

第八話 死の眼鏡へデスメガネ

「やあ、君がヴィンセント君だね？」

……ダンディー……

サイド ヴィンセント

ただいま、自室で眠りについてた俺は。

ネギが遊びに来たとのことで起き上がり、急いで向かうと。

椅子に座り、俺が来るのを待つネギと。

その隣に老け顔のおっさん…高畑さんが居ましたとさ。

デスメガネ…何故ここに。

「おはよ、ヴィン」

ネギは俺を見るなり微笑む。

因みに君付けやめると言ったらやめてくれた。

まあ「いまさら!？」とアーニヤとネギに突っ込まれたが。

「やあ、君がヴィンセント君だね？」

爽やかに笑顔を振りまく高畑。

ちよつと、守護騎士達が殺気だつてるが何故だ？

（主、奴の纏う空気…数多の修羅場をくぐり抜けてきた強者です
多分、我々の殺気にも気づいているでしょう。）
シグナムが念話で話しかける

だって紅き翼に居たし居合い拳の使い手だしな。

チラチラと守護騎士達を見てるし気づいてるのは見て分かる。

まあそんなことはいい。

「そうですよ、高畑さん。」

「あれ？僕の事知ってるのかい？」

原作知識があるからな、それに

「親父と知り合いだと聞きました。」

「ああ、アガットか……」

「それで、俺に一体何の用です？」

と強気で言ってみる、だが笑顔を崩さない。

「ん？ネギ君の大親友と聞いたからね、どんな子かなーって興味もつてさ。」

何時から俺は大親友？

「それに……君は僕たちの知らない魔法を使つらしいからさ。」

！……何処情報だよ、それは。

余りコイツ等に知られたくはないからな……

あっちに行つて警備とかやらされそうだし、シグナム達に何かして来そうだ。

「……なんのことでしょうか？」

「あはは、とぼけなくても良いよ。アガットの手紙に書いてたし。」

親父………とんでもない事してくれたな。

もう無理だ、言い逃れしようにも逃げきれないだろう。

開き直るか！

「あー……それが何か？」

「それは、認めてるって事でいいのかい？……と、そろそろ殺気を抑えてほしいなあ。」

若干苦笑いしながら五人に言う。
だがそれを華麗にスルーする守護騎士達。
しょうがない、俺は彼女達の元に近づき止めてもらう。

「ちょっとは抑えてくれ、な？」

「ですが、何もしないう言う保証はありません。」
ザフィーラが無表情で言うてくる。

「だがな、相手は客だし俺の親父の知り合いだ。」

「けどよ、心配なんだよ……」

「その気持ちは嬉しいがヴィータ、だが見てみる、ネギがおびえてる。」

そう、さっきから黙っているネギが顔を真っ青にしながら震えているんだ。

「自重しろ、な？」

「……分かった。」

落ち込むヴィータの頭をワシャワシャと撫でて、高畑の所へ戻る

「家の人が迷惑かけました。」

「いや、いいんだよ。…話を戻すけど、ちょっと見せてくれないかい？」

と微笑む高畑、腹立つな…よし

「却下！」

叫ぶと同時にネギの腕を掴み外へ走る。

後ろで「あつちよつとー！」と聞こえるけど知らないな。

「ど、どうしたのヴィン？」

余り人気の無い場所にたどり着きネギが問いかける。
いやだってウザいもんだからさ…ネギ連れてこなくてよかったんじやね？

「…あの人ウザくて…」

「タカミチはいい人だよ？それと、ヴィンの魔法僕も知りたいな。」
いい人なのは分かるさ、というかネギまで言うとは…
でもまあ…見せられない理由は無いか。
ただ高畑には知られたくなかっただけだし…いいか！

「分かったよ、…投影・開始。」

俺はネギに見せるため、ある物を作る。

「わぁー…」

ネギが眼を輝かせて見つめる。

そして、手のひらには小さな赤いビー玉が置いてあった。
よし、こんなもんか。

「どうだ？」

「すっごいよ！初めて見た！」

と嬉しそうに喋る、何故かやけに興奮気味に。

ここまで楽しそうに喋るとは…やって良かったと思える。

しかしこのビー玉、どうする？

いや、このまま消せば良いんだが…ネギがビー玉を見つめてるからな…

欲しいのだろう、…ふむ、やるか。

「ほら、これやるよ。」

「え…良いの？」

「ああ、そのかわり高畑さんには言っなよ。アーニヤにも。」

「分かった！でもなんでアーニヤまで？」

「あたしにも頂戴！て鉄拳が来そう。」

あーなるほど…とでも言いたそうな顔をしながら頷くネギ。

まああいつにも後々やるけどな。

その後、ネギと二人で話しながら帰路についた。

第八話 死の眼鏡ヘデスメガネ（後書き）

ちよこつとif！もしも、ネギま！の世界じゃなかったら。

俺は死に、天使と会い転生した。

能力、投影も貰いネギまの世界へ行くことになったのだが…

何故だろうな、眼がさめたときには草むらに倒れていて、起きあがって見れば…

視界が極端に縮まった、近くにある草木が異常に大きい。

何処だここは、俺は…いや。

俺が小さくなったのか、それとも木が大きいだけか。

確かめるべく、近くにある水溜まりに近づき水に写る俺を見る。

真実は…

人間の俺では無く、ハムスターが居た。

水面に写るソレは、俺が動けば同じ様に動く。

ああ…コレ俺なのか…

「あれ？そこに居るのは誰なのだ？」

後ろから声をかけられた、この声には聞き覚えがあり、頭の中でこの世界のことが分かった。

振り替えれば、そこには一匹のハムスター…ハム太郎がいた。

は…はは…

「はかったなミカエルウウウウウウ！…！！？」

「はは、ゆるせよ！」

以上、ハム太郎の世界でした。

……本編に番外編として書くかもね。

第九話 卒業へ魔法（前書き）

話をかなり飛ばします。

第九話 卒業へ魔法

サイド ヴィンセント

高畑襲来から…どれくらいだろうな。

メルディアナ？だか忘れたが学園に入って…高畑が来てつまみ出し
て…

魔法の才能が無いことが分かって…高畑が来てドロップキックで追
い返して…

それを補うためにどうしたら良いかミカエルと話し合って…

高畑が来て奴のタバコを水に浸して追い返して…

思えば高畑、結構な回数こちらに來ているな。

教師の仕事はどうした、というか、何故ネギではなく俺だ。
解せん。

学園生活は…特にはないな。

強いて言うなら…俺に嫌がらせしてくる馬鹿どもを泣かせたことか。
ネギとはあれから会わなくなった。

ずっと、本を読んでいてな。

勉強熱心で良いなあ…本当に、魔法使えない俺にとって羨ましい事
だ。

ああ、魔法については…これを使える様になった。

「破道の三十三、『蒼火墜』！」

目前の木が、青い爆風に包まれる。

かの死神が使う鬼道、使えるようにしてもらった。
ミカエルに頼んでみたら「ああ、別に良いぜ。」と言っていた。
随分と軽いな、それでいいのか天使は。

そして明日、卒業と言っわけだが…

「主、準備はよろしいですか？」

騎士甲冑（バリアジャケット…だったか？）を身に纏い、相棒であるレヴァンティンを右手に、こちらを見るシグナム。

先ほどの鬼道を見て、初めて見たものだから、戦ってみたいと。

ザフィーラ曰く「…戦闘狂の血が騒いだらしいです…」との事。

その時シグナムの睨みに顔を背けたザフィーラ。

弱すぎだろオイ。

まあそれは置いてこう。

彼女の完全装備に対しこちらはただの私服に始解の斬月。
ふざけるなと言いたい。

そしてヴィータ達はと言うと…

「二人とも怪我しないようにねー！」

「…シグナム、手加減を忘れるなよ。」

「ヴィン、ガンバレー！」

「我が主、そんな装備で大丈夫ですか？」

このように、少し離れた場所で見守っている。
助ける気ゼロだ…リンよ、そろそろネタはやめろ。

「フツ…ザフィーラは心配症だな…」
それぐらいお前は危ない奴なんだよ。

「私よりも、主の方が強いに決まってるだろうに。」
と微笑みながらこちらを見るシグナム。
え、なに？こいつ凄い勘違いをしていないか？

「さあ、手加減は入りませんよ。」
とレヴァンティンをこちらに向け、構える。

やらなきゃ駄目…か。

さて…微かに吹く風を全身に浴び、彼女の動きを注意深く見る。
そして…

動き始めた…俺が。
斬月に魔力を纏わせ、月牙を放つ。

それを飛んで避けるシグナム、計算通りだ。
切り上げの動作でまた放つ。今度は大きく、威力も高めで。

ーゴオオー！！

広範囲に放たれる…が。
月牙がかき消され、シグナムの姿が見えない。
まさか！

「ふッ!!」

後ろに振り向き様に斬月を振るが防がれる。
いつの間に…

「ふふっ驚かれていますね。」

シグナムが語りかけてくる。

「昨日日本を読んでいたら…なにやら、戦闘に有利になるような事が書かれていました…」

…まさか。

「虚空瞬動…でしたか?を習得できたのです」

うそーん、昨日今日で覚えたとか…まさか!?

「チートか!？」

「ちーと?…とは一体?」

ああ、違っらしい。

「リインに聞いておけ。」

「はぁ…では、いきますよ。」

そこからは、一方的な攻撃だった。

ずっと防御に徹し、俺は攻撃もさせてくれず一時間経った結果、引き分けと言う形になった。

早く止めてくれと呟いたら、「二人の激しい剣戟に、手を出せなかった」とな。

シグナムは結果とかは関係なく、凄い喜んでた。

「また今度、お願いします」

「死んでもゴメンだ…分かったから泣きそうな顔するな。」

次の日

さあ始まった。

校長の無駄に長い話を聞き流し、卒業証書を受け取る生徒達。本当に、何時以来だろうな。

「ヴィンセント・セルフィア」

「はい。」

呼ばれたので校長の前に行く。

ダルイ…昨日のシグナム戦で疲れが…

「ボソボソ…（そんなだるそうな顔をするでない。」

校長が話しかけてきた。

そんなだるそうな顔はしてないはずだが…

因みに、この人とは若干仲が良い。

チエスの相手をしていたが、かなり弱い。

「ボソボソ（それはすいません気を付けます。」

この言葉を聞いた瞬間、笑顔になる校長。

そして紙を貰って元の位置に戻ったその時。

視界の端に、保護者席の所に。
守護騎士達が居た…号泣しながら。

卒業式終了

「お前達、なぜ泣いてる」

「グスっ…我が主が…ここまで成長…してっ」

アホか、シグナム、お前もホロリと涙流すな。
ザフィーラも涙目だ、

ところで、校長から貰った課題なのだが。
見ようにも見れない…

こっ、緊張するな。…よし。

俺は震える手で、紙を開き内容を見る、その内容は…

「好きなことをしなさい、ガンバ！ww」

俺は自然と、校長室に向かっていた。

ドカァァン！（扉を蹴り飛ばした音）

「ジジイ、貴様に不吉を届けに来た。」
「おっと、きたの。」

俺はすぐにデザートイーグルを投影し、奴に銃口を向ける。
「三分間待つてやる、命ごいをしろ。」
「リイン！んなこと言ってる場合か！」
「落ち着いてください、主！？」

守護騎士達が腕などをつかみ止めようとするが知るか。
俺はコイツを殺る、じゃないと気がすまない！

「離せお前達、この偽ダンプ。ドアを抹殺したいんだ。」
「止めてくださいあるじいいいいいいッ！！！！？」
「フオッフオッフオ。」

頭に銃口をあわせ、いざ撃とうとした時。
俺は視界の端に、赤い悪魔^{アーニャ}を見た。

「アンタ達……」
悪魔が呟く、若干声を震わせながら。
「……う……」

？足場から声が……
俺の足元には蹴り破った扉だ……まさか。

「重いよ……」

やべっネギ踏んでいた！？
「早くどきなさいばかー！！」
飛んでくる鉄拳を、避けることは出来なかった。

「それで、一体何の用かの？」

あの力オスな空間は何処へ行ったのか。

校長の一言で赤い悪魔の暴走は止まった…

っーか

「なにを言いますか…この紙を見てください。」

と校長にアホな課題が書かれた紙を渡す。

すると長い髭をいじりながら。

「ふむ、ちよつとした冗談じゃよ…これが本物じゃ」と机の棚から本物であろう紙取り出し俺に渡す

「最初っから渡してくださいよ…どれどれ。」

俺は紙を開き内容を見たが…絶句した。

何故なら、そこに書いてあったのは…教師じゃなく…

『日本で喫茶店を開くこと。』

無理だろ、無理無理。

馬鹿らしいわ、あー…まじですか？

「日本…僕と一緒に場所だ…」

「そうじゃ、麻帆良という場所で喫茶店を開くのじゃ。」
解せん、おーい、教師とかじゃないのー？

「あの、「ネギと一緒にやし、安心じゃろう。いざとなったら二人で相談しなさい。」いや、そうじゃなく「おぬしの親戚も着いていきたいらしいし…」というか、脅迫されたしのお…まあ良いじゃろう」だから！「なに、先方には話はついておる。」もついいや。」

なんだここの奴らは、人の話を聞かない事を生き甲斐として生きてんの？

ちよつと…ネギは横と宜しくね！と言ってくる。

はあ…ちくしょーーーー！！！！

第九話 卒業へ魔法（後書き）

とある会話

ネギ（以下ネ）「ところでヴィン」

ヴィン（以下ヴ）「なんだ？」

ネ「君、背延びたね。」

ヴ「そうだな…ネカネさんの肩辺りか。」

ネ「僕は…なんで小さいんだろ？」

ヴ「規則正しい生活してないからだろ？夜遅くまで起きるからだチビ。」

ネ「orz」

終了

喫茶店にした理由は…

他の方の小説の殆どが教師だったので。

斬新な発送が欲しかったんです。

教師が良かった方、済みません。

誤字があれば報告ください。ではノシ

第十話 夢と妖怪へ麻帆良到着（前書き）

勘違い要素あり。そして後書きにアンケート。

第十話 夢と妖怪へ麻帆良到着

これはなんだ？夢なのか。

今俺の见ている光景は荒野。

血の臭いが漂う。

足元には、幾千の屍。

幾万の剣が屍達の墓標の様に突き刺さっていた。

俺の手には黒の刀、体には返り血が大量に着いている。

「また、派手にやったね。」

声が、屍しかいないこの荒野に、声が響いた。

私は声の主を見ようと、振り返る。そして…

|| || || || || || || ||

サイド ヴィンセント

夢を見た、異常な夢を。

続きが気になるが、ネギが日本に着いたよと起こしてくれた。
よくわからない人の為に回想シーンに行くぞ。

回想

あの後、ネギはまた部屋にこもり、日本語の勉強をしていた。
俺は、元日本人だ、ちゃんと覚えているから問題ない。
それより、喫茶店で…リアルで子供店長やらせる気か。
料理はまあ出来るから問題はないが…はあ、先のことを考えれば考
えるほど気が滅入る。

「…大丈夫ですか？」

ザフィーラ（犬）が心配して話しかけてくる。

ああ、心配かけていたか。まあ大丈夫では無いが。

「ああ…正直ダメかもしれないな。」

「…何かあるのなら、相談など…」

「分かっている、ほら、もう深夜だ。寝とけ。」

といい、笑顔を向けて眠らせる。

今の奴等に、相談する事はないだろう。

…彼女たちに負担はかけない。いざとなったら、相談するが。

さあ、いよいよ麻帆良に行くわけだが…

「大丈夫？ハンカチポケットに入れた？ポケットティッシュも？ちゃんと持ってる？忘れ物はない？ちゃんと着替え持ってる？手紙は出すのよ？お姉ちゃんは毎日出すからね！！」

「お姉ちゃん…心配しすぎだよ…」

「ネカネさん、過保護だな。」

この様に、ネカネさんは何時までも荷物チェックをしている。同じ事を何度も、リピートして。

つい手紙毎日出すって…心配しすぎです。

と、もう行く時間だ

ネカネさんのリピートが止まり、涙目になりながら手を振って来る。それをネギは何度も後ろを見ながら手を振る。

「さあ、主。行きましょうね。」

シグナムが俺の左手を握る。

おい…精神年齢高い俺にとってこれは…！

つかネカネさんに近い背の俺に子供扱いか！！

「あ、ずりいぞ！アタシも！」

なにが狡いのか知らんが右手を握るヴィータ。
なんでだ…

「まるで兄弟だね。」

ネギがこつちを笑顔で見つめ言う。
まったく…

「うるせえ。」

「そのわりには笑顔だね。」

まあ…これは偶に良いかな。

回想終了

とまあこんなものか。

んで今、麻帆良に着いたが…
ん？何時着いたと？回想してる間にだよ。

さて、来て早々問題がある。

それは「迎えの人、居ないね…」

「ネギ、かぶせるな。」

「え？何が？」

不思議そうに見てくるネギを無視し、周りを見渡す…お。
神楽坂明日菜がいるな、近衛このかも。

ふむ…このか…遠目で見ても分かる。

癒し系の空気を纏っているな。ヴィータに近いな。
よし。

「ネギ、あのオレンジの…いかにも年上好きそうなあの人に道を聞いてこい。」

「え、何で僕？ていうか年上好きって何で分かるの！？」
「勘だ。ほら行け！」

と背中を押す。

不安そうな顔をしながら近づいてく。

「なんでネギ君に頼んだんですか？」
シャマルが問いかけてくる。

ここでネギが明日菜と会っておく。

そうすることでまあパートナーへの第一歩として、このイベントを発生させて起きたかった。

…まあこんなこと説明したって信じる確率0に等しい。

ここは…

「なんとなくさ」

この答えを聞いても尚、うーん、と唸って考えるシャマル。
かわいいな。

「取り消しなさいよこのガキーーーー！！！！」

そら、イベントが始まったぞ。

俺は彼女たちに近づき、声をかけたが…まったく聞いてくれない。
っ！か明日菜、ネギ振りすぎ。

いまだニコニコしているこのかに話しかけよう。

「あの一。」

「ん？どしたん？」

こちらを見て首を傾げるこのか。

うん、癒し系だな、コアラかパンダの空気を纏ってるような。（お
前何言ってるの？by作者）

「そのの、頭揺さぶられてる子の知り合いなんです…」

「あ、そうやったんか。ごめん。あの子のお兄ちゃんなんか？」

「いえ、違いますね。所で、学園長の所に行きたいのですが、場所を教えて頂けないでしょうか？」

なるべく低姿勢で行く。

初対面の人には礼儀正しくしろとな。父に言われた。

まあこのかなら多分気にしないだろうな。

「ええよ、ちよつと待っててな。アスナ、アスナ。」

「ごめんこのか、もうちよつと待って。もうちよつとこのこいつを締めさせて。」

「ヒイヒイ!?」

アスナがネギの服を握りながら答える。

その返答を聞き涙目になりながら悲鳴をあげ、助けを求めるネギ。

残念だが…いまの俺ではお前を助けられない。

まあ問題はないはずだが…そろそろ。

「ネギくん、ヴィンセントくん。」

来たな、ダンディー。

突然の高畑襲来により、顔を真っ赤にしながら「たっ高畑先生!？」

と叫びネギを離す。

乙女だな。あの凶暴さが無ければ。

数分後

高畑が来てなんとかアスナの暴走は止まった。

そして何故ここに子供が居るのかというアスナの疑問を高畑が答え。
今、俺達は学園長室の前にいた。

道中このかとシャルマルが料理について話し合っていたが…

俺が横から「鍋の底を溶かした癖に」と呟いたら落ち込んだ。

まあ…事実だし

「フオッフオッフオ、よく来たのう、ネギ君。ヴィンセント君。」
と目の前に座るのは日本の妖怪が髭を触りながら喋る。

「ボソツ（なあヴィン、あのオッサン頭長すぎじゃねえか?」

「ボソツ（あれはぬらりひょんと言ってな、日本の妖怪だ。」

「ボソツ（マジか!?」

「ボソツ（ああマジだよ。」

「聞こえとるぞそこ!」

あ、バレた。

「ごほん、それでは二人とも、卒業証書を見せとくれ。」

といわれ、鞆から紙を見せる。

「ふむ確かに…ここでの修行はとても厳しい。それでもやるかの?」

と、髭を触りながら聞くじいさん。

髭触りすぎだろう。

ここでやらないと言ったらどうなるんだろう。

非常に気になるが…言ってしまうばここに来た意味が無くなる。

「ハイ!」

「やるに決まってます。」

この答えに満足したのか、満面の笑みを浮かべる学園長
ぬらりひょん

そして、学園長の隣に控えてる高畑も、にっこりと微笑んでいた。
こっち見んな、ネギの方を見る。
アスナが顔赤くしてるぞ。

「では、二人の住む場所なんじゃが…ネギ君は、このか達の部屋で
良いかの？」

ここは原作通りか。

「ちよつと待つてください学園長！その黒髪の奴なら大人しそうで
良いですけどよりにもよって何でコイツ！？」

と俺に指を向け、学園長に訴える
あれ？俺もネギと同じ年なんだが？

「頼む、それにヴィンセント君は住む場所は決まっているんじゃ。
住む場所が決まってるって…」

エヴァンジェリンじゃないよね？

「それでは、解散じゃ。ヴィンセント君達は残ってほしい。」

そして、終始笑顔のこのか、緊張していたネギ、不機嫌なアスナが
出ていった。

そして、学園長室に、張りつめた空気が漂った。
なるほど…ここからが本番って訳か。

サイド アウト

サイド ぬらりひょん

ふお？何か名前が変わっている気がするのぉ…
まあそれは良いとして。

今、目の前にいる者達は報告書に在ったもの。
ヴィンセント・セルフィア君にその親戚達。

報告には、ネギ君と同じ年で、大人びた性格と。

そして魔法は使えないが、儂等の知らない魔法を使う。

それは、剣を作り、槍を作り刀を作り、斧を作りと、様々な武器を取り出すことのできる…らしい。

その仕組みを知りたいのじゃが…高畑君曰く、「余り言いたくない」との事。

ふむ…何か重要な事があるのか…それとも、彼の過去に何かあったのか…

儂は過去に何かあると予想しとる。

過去に彼の心を変える出来事があったから、あの様に大人の様な振る舞いをしているのかもしれない

自分の思いを殺し、ひたすら我慢し、周りの皆を見守る。

そうする事により、自身の周りに壁を作り、皆と関わらない様にとる。

じゃが…例外も居るそうじゃ。

彼の周りに居る親戚達。

彼女達はその事件から突然彼の元に来た。

タカミチ君が言うには、親戚など居ないとの事。

では彼女達は何者なのか…

じゃが、彼女達から魔力は感じる、少なからず戦えるのじゃろ。

「さて…話とは、何でしょう？」

警戒しながら問いかけてくる。

そんなに警戒せんでも…それに彼女達からの殺気が痛いのお…

「そう警戒せんでも良いじゃろう、年寄りにそれはキツイわい。」

ヴィンセント君は彼女達を宥め、殺気が収まる…

収まったけど、睨まんといてほしいのお…

「話というのはの、魔法に関してじゃ。君は、魔法の矢を使えないと聞いたが…本当かの？」

「ええ、本当です。何度やっても、出来ませんでしたから。」
と、顔を歪ませる。

ふむ…魔法を使えず、日々苦勞したのかのお…

「こちらのタカミチ君も、魔法を使えない体質でな。」

「知っています、居合い拳という技を使うんですよね？」

詳しいのお。

…やけにタカミチ君がニヤニヤしとる。
まさか、居合い拳を教えようと考えて…

「ヴィンセント君？居合い拳を使いたくは無いかい？」

ホントに教える気じゃったああああ！！！！

何故？突然すぎるじゃろ！？

しかも目がキラキラしとる！？

「…今は遠慮します…」

「そっか、気が変わったら何時でも言ってくれ。」

と、やんわりと断られるも、ニヤけ顔のタカミチ君

…変わったのお。

「それで？他に用件は？」

ふむ、まあ一通り良いじやろう。

また今度、聞かせて貰うとしよう。

サイド ヴィンセント

星はいらないと俺は思う。

一通り話は終わった…高畑はキラキラした目で見ているが…何故だ？
そして話の途中に学園長は何故悲しそうな顔をしたんだ？
解せん。

「そうじゃった、…ほれ、お主たちの店までの地図じゃ。因みに、
その店はずい最近潰れた店での、店内にはテーブルや椅子とかが有
るはずじゃから、それを使いなさい。」

と、学園長から地図を貰う。

ふむ、テーブルなどがあるなら行けるか。

無かったら学園長に頼むところだったか…

後は食材か…

「食材の事も気にせんで良いぞい。儂が負担しよう。」

なに！？本当か！？

「いいんですか？」

「なに、問題ないわい、じゃがある程度売れてきたら、後は自分だな？」

「はい。」

よし、食材も何とか出来そうだ！

よし、気合いでいくぞ！

「フオ、フオ、フオ、それでは解散じゃ。」

そして俺達は、町に行き地図の通りに歩いた…

それにしても賑やかだな。

活気に満ちているなあ…

それで。

「なあシグナムー、道はそっちであってんのかー？」

「またゲームセンターの前に来たわね。」

そう、シグナムが「地図は私が見ましよう。」と言って、その言葉に甘えようと思ひ頼んだのだが…

絶賛迷子中だ。

「うーむ、おかしい…」

「将は方向音痴だったのか…」

「…誰かに代わって貰ったほうが良いな…」

「うるさいぞそこ！…ハッ！？主！私は別に迷ったわけでは…」

と顔を赤くして手をぶんぶん振って否定するシグナム。
落ち着かせようと頭を撫でながら…

「地図…俺が見よう。」

「いやつわたs「俺が見よう。」ハイ！」

半ば脅しのように地図を受け取った…

そしてガツクリとうなだれるシグナム。

ククツ、恥ずかしがってるシグナムはイジリがある。

因みに場所は今の場所の逆方向、それを知ったシグナムは顔を赤くしていた。

そして着いたが…

外見はまあいい、そこらへんと同じ様な外装だ。

肝心なのは内装の方だが…

思っていた以上に汚い。

あちこちに蜘蛛の巣だらけ。

そして、「うわ、ネズミだあ!？」

足場をウロチヨロと走り回るネズミが多数。

それを凝視するザフィーラ（犬）

そろりと近づき…そして

ポフッ

前足でネズミを踏んだ!？

えーちよ、なにやってるんだザフィーラああああ!？

「…チヨコマカとうつとおしかったので…」
だからって踏むなよ。

シャル達が涙目でお前をみてるぞ。

はぁ…まずは片づけからか…

第十話 夢と妖怪へ麻帆良到着（後書き）

どうも、この小説を見てくださっている皆様。
ジークフリートと申します。

えー、この度、アンケートを取らせて頂きます。
喫茶店の店名を、募集します。

俺の頭では店名を作れない…

ですから皆様！

俺に力を貸して下さい！！

締め切りは土曜日まで！

第十話 本屋・店へ内気な少女と店名 (前書き)

タイトル通り、彼女の登場です。
んで、後書きに…

第十話 本屋・店へ内気な少女と店名

サイド ヴィンセント

叫びたくなるな。

いや、突然ですまない、だが事実一回叫んだし。
数時間掛かって後少して掃除完了なのだが…

黒光りするGが大量発生、シグナム硬直、ヴィータ泣きながら俺にしがみつく。

シヤマル絶叫、リインフォース逃走…が俺に捕まり失敗。

ザフィーラ無表情…イヤ、汗ダラダラだ。

俺、ザフィーラを盾にどうするか思考を巡らせる。

カオスだ。

どうする？高畑よんで居合い拳で吹き飛ばしてもらったか？

…やめところ、あの人ならやりかねん。

とりあえず…バ。サン買ってこよう。

数分後

最寄りの店にて、バル。ンを買い、店にぶちまけた。

まあ30分あたり戻れないがな。

今は各自別行動で、時間を潰すそれまで…学園長の所に行こう。

そして事件が起こった。

さて、迷った。

現在女子中等部の近くなのだが…やばいよ

このままじゃ…変態扱いされてもオカシクナイヨ？

だれか助けてー！！！！

と司会の端に…本を大量に持っている女子が見えた。

前が見えないのかフラフラと動いて…危なっかしいな。

ああ、ふらふらなまま階段を降りるな。

というか、あれは宮崎のどかか？

ということは…ネギフラグか。

まあそれはどうでもいい、今はこの状況を…アレが気になってどうにもならん。

その時

ズルッ

階段から足を滑らせ、段差から本を落としながら落ちる宮崎。

不味い！

自然に体が動こうとした…が途中で止まる。

確かここでネギが…居ないだと！？

チッしょうがない！

俺は走った。

宮崎叫び「キャアアア！！」

グイン雄叫び「おおおおお！！」

ボフッ

少し身体強化した上で走ったからギリ受け止めた。

…お姫様だっこになっているのは…こっちの方が受け止めやすかったからだ

…あれ？アスナってこの時見てたよな？あれ？ネギの魔法バレーイベント潰れた？

……過ぎてしまった事は気にしないでおう。気にしないったら気にしない。

「……あれ？」

と、強く瞑っていた瞼が開かれる。

前髪が長くて顔の表情はあまり分からないが…驚いてるな。

「へっ……えええええええ！？」

「おわっ降ろすから暴れない！」

ようやく現状を理解したのか、顔を真っ赤にしながら暴れ始めた。

イメージはマグロが腕の中で暴れる感じ…でもないか。

とりあえずコイツを降ろす、と顔を俯かせながら顔に手を当てなんかブツブツ言ってる。

……当分続きそうだからアレだ、散らばった本を纏めよう。

集めてる本の中から興味深い本が多数あった。

『どれだけ下手でも大丈夫 美味しい料理の作り方』
から

『カバディ公式ルール』

などがあつた…カバディ…

そんな事を考えながら本を集め終わった。

その数18…誰かに手伝ってもらえよ。

とりあえず集めた本を抱え話しかけることにした。

「あのー。」

「恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい
い…」

怖い…話しかけずらいオーラが…だがしかし負けん！

「もしもーし！」

「ふえ！？…あ…」

「大丈夫ですか？…と、はい。」

とまだ驚いている宮崎に渡す。

少しおどおどしながら受け取る。

そんなに怖いかな？

「はい、大丈夫です…ありがとうございませゆー！」

噛んだよ、しゅって…

笑ってしまいたい衝動を押さえ、気にしないでと言う

「あの、…ここ女子中等部ですけど…」

と…そうだった、この子を助けても俺の現状は変わらんのだった。

…そうだ、学園長室…この子に聞くか。

「いや…この学園長に用があつて…道に迷つてしまつて。」

「え…学園長の場所なら、ここから逆の場所に…」

なん…だと…

と言うことは俺は…逆の道を歩いていたのか！

そんな…シグナムの事言えないじゃないか俺は！！

「そうだったのか…ゴメン、ありがとうございます！じゃ…！」

「へ？」

急いでこの場から離れる…決して恥ずかしかつたわけではない。

だいぶ走つたところで…丁度高畑と出会つた。

昼休みだったらしいから案内を頼んだところ笑顔で良いよと。

助かつた…このまま彷徨っていたらマジで不審者扱いだ。

ホームルームの注意事項に出されたくない。

「ほら、ここだよ。道は覚えたかい？」

「はい、ありがとうございます。」

それじゃあ。と高畑は背を向け歩き出す

数分かけて着いた学園長室。

ここまでの道のりに高畑が居合い拳について語っていた。
それを聞き流したかな。

とりあえず行こう。

「グインセントです、入りますよ。」
扉を開けた。

「フオツフオツフオツ、ちょうど良いところに来たの。」

椅子に座り、髭を触りながらこちらを見る。
丁度良い？学園長も俺に用があつたのか？

「実は言い忘れていた事があつたのじゃ、…ここに来る前に魔法生徒や教師に会つたかの？」

「はい、皆さん強そうでした。」

高畑と学園長室に行くとき、遠くでだがガンドルフィーニさんや脱げお…高音さん、刀子さんなどを見た…遠くからでも分かることは、みんな強い事だ。特にガンドルフィーニさん。

「フオツフオツフオツ、そうじゃろう？それでの、皆この警備をしている、何故か…分かるかの？」

何故クイズみたいに聞いてくる。

まあいいや、とりあえず回答だが…

確か、ここには色々なものがあつたはずだ。

えー…例えば、図書館島の本とか、近衛木乃香とか？

それらを侵入者から守るために警備を…まさか？

「そうじゃ、そのまさか。君には、警備をやってもらおうと思つるじゃが…どうかの？」

やっぱりー、店を経営して警備もって…疲れるわ！！
過労死しろってか？

「…正直やりたくは無いです…」

その言葉を聞くなり、学園長は左手を広げ、突きだしてきた。

「一日五万…でどうかのお？」

五万か…いや、もう一声！

無言で首を横に振る。

「…七万でどうじゃ！」

…良いか、一日七万で。

「分かりました、それでいいでしょう。」

「助かるぞい！では、今日の夜十二時に世界樹前に集合じゃ。」

「えっ、今日からですか？」

「いや、他の者達にも知らせておきたいし…君の実力も知りたいしの？」

実力…なるほど、この流れで聞き出すつもりか？

…刀を予めに作ればいいか。

（我が主、バル。ンの効果が切れましたよ。）

突然、頭に響く声。

念話だ…バル。ンが切れたか。

リインフォースにすぐに帰ると返して、この話を終わらせることにする。

「分かりました…では、十二時に。」

「うむ、彼女達も連れてくるようにの。」

…シグナム達も？

「彼女達も戦えるそうじゃし、彼女達にも警備をしてもらいたくての。」

……あ？

なにをいつているんだ？

サイド 学園長

正直、彼を見誤っていたのかもしれない。

いまの目の前に子供、この子からとは思えない空気を放っていた。事の発端は儂の一言じゃ。

彼は警備員になると言っとった…

そこで儂は、彼の周りに居る者達にも手伝ってもらおうとおもった。それだけで木乃香の安全は…大幅に上がるはずだと。

じゃがそれが裏目に出た。

突如、彼から出る穏やかな空気が消え失せ。

熟練の戦士でも凍り付くような殺気を出した。

しまった…どうやら彼の逆鱗に触れてしまったようじゃ。

背筋に冷たい汗が流れる…

そして…彼は眼を鋭くし、こちらを睨みながら喋る。

「……………させませんよ、絶対……………」

静かに呟く。

しかしこの静まり返った空間で、十分に響いた。

じゃが儂とて、譲るわけにはいかん。

愛する孫のためじゃ、…引けないのじゃよ。

「…ならば、これでどうじゃ、…十二時の君の実力を見ると、君が相手に勝てたら無しにしよう、じゃが儂が勝ったら…」

「…チツ。」

ヴィンセント君は、舌打ちをしながら扉を乱暴に開け、消えた。それと同時に緊迫状態から解放され、深く深呼吸をする。

はあ…はあ…彼は本当に子供なのかのお…

寿命が縮んだわい。

しかし…誰を戦わせようかのお？

サイド ヴィンセント

久しぶりに怒ってしまったな。

だが反省もないし後悔もないさ。

俺がシグナム達を戦わせない理由はただ一つ。

リリカルの方では、設定上彼女達は八神はやてに会う前は戦い続けていた…と思う。

だから…彼女達には、休んでいてもらいたい。
戦うのは、俺がやるよ。

さて、シリアスっぽい事を考えながら歩いていると着いたようだ。
…窓からはヴォルケンリッターのみなさんが箒を持って掃除をしている。

…手伝うとしよう、俺はすぐに中に入り、バル。ンで死んだ虫どもを処理し始める。
死んでるって言うてもこれは…はぁ。

サイド シグナム

主の様子がおかしい。

いつもは真剣な表情をして、何かを考えていて…それでも私達に気づけば笑顔を向ける。
それが今、見るからに怒っている。

……私達の居ない間に何かあったのだろうか。
何があつたのか問い詰めたいが思いとどまる。
問い詰めて何になる？主の負担を無くせるか？
いや、主のことだ、私達に心配をかけさせないため、大丈夫だと言
うはずだ。
ではどうする……そうだ！

「主、店名をどうしますか？」

今は、彼の考えている事をすり替えよう。
主にはもう少し私達を頼ってほしい

サイド ヴィンセント

虫の死骸を処理し、ガス、水道、食器、料理器具などを調べ終わり。
粗方やること全て終えた後、シグナムの「店名はどうする？」とい
う質問に、すぐに答える事は出来なかった。

そうだ、店名必要か。余り考えていなかった…不覚ッ！

そして俺達は店名を考えることにした。

一巡目

ヴィータ「鉄槌ッ！」

リン「痛そうだな。」

ヴィン「鉄槌の騎士だからか？」

シグ「どちらにせよ却下だな。」

ザファイ「…論外だ…」

シャ「アハハ…」

ヴィータ「んだよチクショーー!」

半泣きのヴィータをチラ見し、次へ。

シャ「癒しの空間はどうでしょう?」

ヴィン「まあ響きがいいが…」

リン「何処の店でも使ってそんなキャッチフレーズですね。」

シグ「普通だな。」

ザファイ「…シャルだからな…」

シャ「ひどーい!」

シャルもヴィータと一緒に拗ねていたが…続けよう

リン「天空の城ら「終了」。ユタ。」

ヴィン「止めたのに最後まで言い切りやがった!？」

シグ「天空って…ここ地上だぞ。」

ザファイ「…城でもないしな…」

リン「ぼつ…ですよね。」

さて…未だに良い案がないが…

これちゃんと終わる?

シグ「烈火のスペース」

ヴィン「どうせ烈火の将だからだろ。」

ザファイ「…作者は何時までこのネタを引っ張るつもりだ…?」

シグ「…私もこれは無いと思いました。」

まともなシグナムも降りたか…後はザフィーラと俺だけ正直…ザフィーラならいける気がする。

ザフィ「…安らぎのワンちゃん広場…」

ヴィン「……………」

ザフィ「……………」

ボツ組「……………」

ザフィーラは、なにも言わずにボツ組に歩み寄る。

正直あんなのが出るとは思わなかった。

つかザフィーラ、お前は狼だろ。

ヴィン「翠屋」

シグ「今までで一番まともですね。」

シャ「響きも良いですし。」

ヴィー「良いんじゃないねー？」

ザフィ「……賛成です」

なかなか評価が高かったので決定した。
だがしかし、リインは気づいていた様だ。

「我が主…翠屋とは…」

「分かっている…皆まで言っな。」

そこからリインは喋ることは無かった。

…察してくれたようだ。

べっ別に自分で考えなかった訳じゃないんだからね！？

……………ごめんなさい……………

サイド 内気な少女

「はあ…」

今日、私は不思議な人と出会いました。

見た目は明らかに外国人で…

その人に危ないところを助けてもらって…

おっお姫様だっこされて…

顔が赤くなっていく、今思い出すと恥ずかしいし…

でも…余りイヤじゃなかった…

それで…その時に見えたその人の目。

青くって、まるで空みたいな色でした。

それで、散らばった本を拾い集めて渡してくれて。

顔立ちも綺麗で、優しいなって…

「ふむふむなるほど」

「そういう事だったのですか。」

「ええ！？ゆえ、ハルナ何時の間に…」

「ラブ臭がすると言って走り出したのです。」

「そんな事はいいいから…それで？その人名前は？」

名前…あ！

聞いてなかった…あの人、走って行っちゃったし。

「聞いてなかったの!？」

「う、うん…」

「大きなミスですね…容姿とかは覚えているんですか？」
容姿…

「黒髪で…ちよつと髪が逆立ってて…目が青くて…上下黒い服…だつたかな？」

「うーん、分かんないなー。」

そうだよね…分からないよね…

ちよつと期待したけど…残念だな…

「あ、その人僕知ってますよ？」

「「「え？」「」」

ネ、ネギ先生！？何時の間に…

「髪のがツンツンしてる人ですよね？」

僕の友達ですよ。」

ネギ先生の友達？でも…年上っぽい感じも…

「彼に用事があるなら今度場所を教えましょうか？」

「え、良いんですか？」

「よかったじやんのどか！」

うん…お礼もまだだったし…

…早く会いたいなあ…

第十話 本屋・店へ内気な少女と店名（後書き）

ヴィン「はい、後書きコーナー」

ネギ「ヴィンとネギと時々質問ー!!」

ドンドンパフパフ♪

ヴィン「で、なにこれ？」

ネギ「えつと…『ここでは、この小説に出てくるキャラクターとお話する、または読者の質問に答えよう、そんなコーナーです』…だつて。」

ヴィン「なるほど…突然だな、質問は来ているのか？」

ネギ「…ぜんぜん。」

ヴィン「だめじゃねえか。」

ネギ「でもまだキャラとの雑談が残ってるよ？」

ヴィン「…今回はやめよう、次回に持ち越す。」

ネギ「分かった、えー、読者様の疑問に僕たちは全力で答えます！」

ヴィン& a m p・ネギ「待つてまーす！」

第十一話 怒りへ翻弄（前書き）

後半グダグダだなーと俺は思います。

因みに今回、Fate/EXTRAの設定と宝具が登場。

効果これでよかったっけ？

分からない人は調べてね。

第十一話 怒りへ翻弄

サイド ヴィンセント

さあ、店名も決まった…二日あたりでオープン出来るか？
そのまえに守護騎士達はどうするか…
店の手伝いをさせるか…仕事を探させるか。
まあ俺としては前者の方がいいが…彼女達にはやりたい事は無いの
かな？

「なあヴィータ、おまえに今、やりたい事はあるか？」
近くでまだ店名の事で拗ねてるヴィータに聞いてみる。

「んー…別にねえな、強いて言うなら…ヴィンの手伝いかなー？」

首を傾げながらうー、と唸るヴィータ。

そうか…まあうれしいが…

シグナム達は…

「……スー…スー……」

イスに座り、テーブルに頭を預け眠っている。

そういえばドタバタしてたからな、疲れが溜まったのだろう。
彼女達に起こさないよう毛布をかけ、窓際にあるイスに座る。

外は暗く、月明かりで道路を照らしていた

もう九時か…あと少しで…

相手は一体誰なのか、それだけが頭に残る。

高畑の可能性もあるが、俺という存在イレギュラーがいる。

別の…原作には出てこなかった奴という可能性もある。

…不安だな。

「どうしたんだ、ヴィン？」

「え？」

「なんか怖い顔してたぞ？」

と俺の顔をそつとのぞき込むヴィータ。

月明かりに照らされ、サラサラな髪が少し輝いて見えた。

うーむ、心配かけたか？

「いや、問題ないさ。」

「…そっか、けど何かあったら相談してくれよ…シグナム達だって心配してるんだからさ。」

そうか…心配かけていたのか。

頼ってはいけないと思いこんでいたのが仇となったか。

これからは、少しずつ、少しずつ…頼っていこう。

それにしてもだ。

「ヴィータ、眠くは無いのか？」

シグナム達は疲れきっているというのに、何故元気なのか？

「いや、眠いんだけどさ…ヴィンは寝ないの？」

「ああ、まだ眠くないからな…先に寝てなさい。」

眠そうなヴィータを奥の部屋に連れていき、眠らせる。
ものの数分で夢の中にいったようだ。
やはり疲れていたのだろう。

因みに、この店の二階、普通に暮らせる部屋だった。
たぶんここが俺達の住む場所なのだろう。

…そろそろ準備をするか。

俺はただの、普通の刀を作りだし、店を出た。
世界樹広場に向けて…
空にある月は、大きく、綺麗で不気味にこちらを見おろしていた。

サイド アウト

世界樹広場前

そこには、もう数十人もの魔法生徒、魔法先生がいた。
ガヤガヤと新しい仲間の事を話していた。

一体どんな人物であるのか、年は幾つなのか。
強いのかと、様々な疑問が飛び交う中。

……ザッザッザッ

遠くからの足音に周りの声が消えた。

学園長はようやくかの、といった様な表情で。
高畑は笑顔のまま、足音の人物を見つめていた。
そして

「ふお、ふお、ふお、ギリギリじゃったな。」
「申し訳ありません、ここまでの道のりが分からずに少し迷ってました。」

現れた黒髪の少年。
前髪からうつすらと見える青い瞳。
闇にとけ込むかのような黒いコート。

学園長達が待っていた人物、ヴィンセント・セルフィアが到着した。

「さて…この者が、皆の仲間となるヴィンセント君じゃ。」
「ヴィンセント・セルフィアです…よろしくお願いします。」

そして軽く頭を下げるヴィンセント。
その名前を聞き、数人が何処かで聞いた名前だな…と思考する。
そして…閃いた。

「もしかして…あの写真の子…」
一人の魔法生徒…桜咲刹那が指をさし、問いかける。
…若干指が震えているようだ。

当然本人には記憶になく、首を傾げるばかりだ。
そこで高畑が爆弾を投下する。

「うん、その子だよ。」

辺りに静寂が包み込む。

ヴィンセントは「は？何が？」と言いたげな表情だ。

「ええ ええ ええ ええ！！？？」

静寂からまた騒動に。

「え、あれ？あの子が？」 「背でかくないか？」 「まさかここまで成長するとは……」

「おかしい、坊やと同じ年の筈なのにどうして奴の方が上なのだ？それにゴニョゴニョ…（写真では癒し系の癖に直ではカッコいい…私は何を言っているんだ！？」」

と、周りはヒソヒソと本人に聞かれないよう話していた。

しかしヴィンセントはそれを後目に頭の中で白い狼と雑談してた。

「前から気になっていたんだが、お前に名前はないのか？」

（ふーん、なら俺がつけてやるか？）

「ほう、ならば頼みますぞ。」

(おう…………ウルフでどうだ。)

「狼だからか？まあ、響きは良い、気に入りましたぞ。」

脳内でこんな会話があつた……

そしてまだざわざわと騒がしいなか、学園長がなんとか止めた。

「今回は、このヴィンセント君の実力を知るために皆をここへ呼んだ。」

誰か、この子と戦いたい者は居ないかのお。

この一言によりまたしても騒がしくなりそうだったが学園長の睨みにより、騒がなくなった。
そして

「学園長、僕が行きます。」

沈黙の続く中、一人の男が手をあげる。

ヴィンセントと一緒に黒い髪、眼鏡をかけた「お前マジで戦えるの？」と言える様なヒョロヒョロした男。

「そうか、では頼むぞ龍臥君、他の者は下がちなさい。」
「はい。」

（誰だ、原作には居なかったはず、やはりイレギュラーか。ヒョロヒョロだぞ、戦えるのか？そして龍臥って明らかに名前負け…いや、見た目で判断してはダメだな。見かけに反して強いはずイヤしかし……）

思考を巡らせ、どれほど思いだそうとしても出てこない。
そして力量も計れない、結果は分らずに話は進む。

「君の様な子供に負けられない、僕の仕事がかかってる。」

と殺意のこもった目で睨みつける龍臥。

台詞の中に妙な言葉が混じっているのに気づく。

仕事がかかってるとは？

またしても考え続けるヴィンセントに学園長は説明する。

「龍臥君は教師なのじゃが少し問題を起こしてな、生徒の保護者たちに退職しろと殺到しての。」

「学園長、その話は！」

龍臥が止めにはいるが面白そうな話なのでヴィンセントは龍臥の口を塞いだ。

「続けてください!」

「フゴー! (やめてくれー!)」

「ボソツ (黙れや)」

「!?!」ビクッ

押さえつけていても暴れ出すので小声で黙らせた。

「う、うむ…龍臥君は潔くやめた、じゃが警備もやめると思ったんじゃが警備はやめないとってな。どうするかなと思いついていたある事を思いついた。」

「それがこれですか。」

学園長が答える前に先に答えにたどり着いたヴィンセント。学園長は頷き、続きをはなす。

「お主と戦わせて、決めようと思ったのじゃ。」

お主が勝てば龍臥君は警備から外され、龍臥君が勝てばお主は抜けて貰う。」

と、サラリと喋る学園長にさらなる疑問が生まれる。

この男をやめさせて良いのか? 戦える人が居ればいるほどこのかは安全になるはず。

その時、念話で学園長が話しかけてきた。

(龍臥君は口先だけで弱くての、それにチームプレイも出きん。そのため他の者たちもこ奴をよく思っておらんのじゃ、じゃから居

ても居なくても大差ないのお。)

またしてもサラリと言う。

それで良いのか、ヴィンセントはこの男に哀れみの視線を送る。

そして心無しか、周りの者達も龍臥に向ける目が哀れみなどがある。ほんの少人数はどうでもよさげだが。

「と言うわけだ…僕は負けられないんだ！」

刀の切っ先をこちらに向け睨みつける。

だがヴィンセントは物怖じせず、刀を抜き始める。

「俺も、負けられないんで。」

「じゃあ二人とも良いね？」

高畑は二人に問いかける。

声に出さずに頷きだけで返す二人。

「怪我の無いように…始め！」

——ガギイイン！——

開始の合図と共に鳴り響く音。

龍臥が先に仕掛けたがヴィンセントは防いだ、が。

「お、重ッ！」

細身の割に中々重い一撃を放たれる。

一体何処からそんな力が出てくる。

そう疑問になりながらから空きの腹を蹴り飛ばし、距離をとる。

「~~~~ッ!？」

手のひらにまだ痺れが残っている。

(こんな物何度も受けてたらやばい!)

ヴィンセントに焦りの表情が浮かぶ。

「はああああ!!!!」

「グッ!？」

どれだけ考えても相手は待ってくれない。

必死に攻撃を避け、防いでいく。

防戦一方だった。

サイド ヴィンセント

「どうした、その程度かい!？」

「チッ!!」(学園長め、コイツ結構強いぞ、…いや、魔法を使わないし神鳴流みたいな技も使わない…あ、そっか。)

何度も防御を繰り返し、手が限界に近づいた頃、ようやく分かったヴィンセント。

(力技で戦ってきたのか!)

魔法も、剣術も使わず、ただの力技で戦う龍臥。

もしかしたら、鬼道とか使ったら勝てるんじゃないか?

そう思いつつ奴の攻撃を防ぐ、だが鬼道などを使えば後々面倒なこ

とになるはず…

主に幼女吸血鬼に。

その時、思わぬ事態が起こる。

——ガキャン——！

上段斬りを防いだとき。

俺の持っていた刀が折れた、力任せに振りおろされる刀を防いだ
た、多分限界が来ていたのだろう。

振り降ろされる刀。

そのまま体を斬り裂いた、鮮血が飛ぶ。

痛い、激痛にバックステップで距離を取り、膝を折ってしまった。

「クツ…いつてー…」

もう少し頑丈なものにすれば良かった。

ちくしょう、血が止まらねー

「…学園長、そろそろ。」

「うむ…ヴィンセント君の武器も折れた、——」

声が聞こえなくなった。

否、聞きたくなかった。

聞いてしまったら、俺の敗北は決まる。

…結局負けるのか、絶対に勝つと意気込んでいたのにこの様か。
唯一助かるのは俺の力を知られていない事…？

いや、終わってない。負けてはいない。

そうだ、何故力を隠すんだ俺は。

シグナム達を戦わせる以上に厄介な理由か？

否、大した理由ではない。

全く…自分に腹が立つ、……………殺したい位にな
ほら、立つんだ。

ここで終われるか。

「学園長、ちょっと待ってください。」

いつの間にかしゃがみ込んでいたヴィンセントが、立ち上がり学園長の言葉を遮る。

龍臥は驚いていた、手加減はしなかった。
なのに立っていることを。

「まだ、戦わせてください。」

試合続行を求める言葉に、学園長や他の人も驚く。
体は血に染まり、武器も折れて無くなった、なのにまだ戦意は消えていなかった。

「……本来なら止めるところじゃが、続けるかの……」

「ありがとうございます。」

学園長に感謝し、龍臥に顔を向ける。

その時、ヴィンセントは脳内で呼びかけていた。

（ウルフ、力を貸せ。）

『だが主殿、変身したらお主の体に変化するぞ?』

（なら身体能力強化される位でいい、頼む!）

『それ位なら…よし、行くぞ。』

突如、紫色の炎がヴィンセントを包み込む。

驚愕する龍臥、だがそれ以上にエヴァンジェリンが驚いていた。

微かに、一瞬だけヴィンセントから魔族の魔力が感じられた。

奴は魔族なのか、私と同じ存在なのか？

と彼女の頭に浮かび上がる疑問。

だがそれを遮るかの様に龍臥は叫ぶ。

「それは…一体なんだ！」

「…別に、なんでも良いだろ。投影・開始」

龍臥の叫びを無視し、右腕に魔力を通し、武器を作る。

その武器は、小さい、緑色のボウガン、手の甲に装備する。

またしても驚きの声を上げる観客。

それを無視するかのようにボウガンを向ける。

「行くぜ…顔の無い王よ、アンタの戦い方、借りるぞ。」

そして一瞬にして姿を消す。

龍臥はまたしても叫びを上げる。

「なッ何処に行った!？」

その叫びは必死、観客達は静かに見る。

そして。

(…行け!)

その場からはなれたヴィンセントは、龍臥を遠くから狙う。
狙い…引き金を引く。

放たれた矢は一直線に龍臥の首に飛ぶが、僅かに避けられた。

「っ…卑怯だぞ!!」

卑怯と叫ぶ龍臥に周りは賛同する。

エヴァンジェリンはそうは思っていないが。

「戦いに卑怯もクソもない。そうだろ？」

自ら敵の目の前に現れるヴィンセント。

その顔は、無表情、先ほどまでの青い瞳は今は、血のように赤い瞳だった。

「君は、正々堂々と戦えないのか!？」

「知らんよそんなもの、まさか。相手の土俵で戦えと言うのか？」

「そうは言っていない!」

「剣には剣、弓には弓と言うルールは無いだろう?…時間の無駄だ、
ここらで潰す。」

終わりを宣言するヴィンセントに怒りを露わにする龍臥。
無様にも突っ込む。

だが、ヴィンセントの元にたどり着くのは不可能だった。

龍臥は体の異変に気づく、何故かダルイ、突然、何故だ?

ついに倒れた龍臥。

それを見おろすヴィンセント。

そして気づく、先ほど矢を弾いたとき…頬を掠めたこと。

「ぐっ…まさかあ……」

「ご明察、先ほどの矢に毒を盛った。」

やはり、観客達がヴィンセントに非難するかの様な目を向けるが気にしない。

「ああ、問題ないさ、どうせ体がダルくなるだけだ。命に別状はない。…立てる筈だぞ?」

「君は…恥ずかしくはないのか!」

「恥じることはしていない、どうせ正々堂々と戦って勝った。それで?何かあるのか?重要なのは結果だ、勝ったと言う結果だけ。過程は必要ないだろう?」

「…立派な魔法使いとして!」

「そんなものは目指してないさ、俺は。」

その場に居るもの全員驚愕した。

ならば彼は、何故ここに?その疑問に答える。

「そんなものになるために此处に来た訳じゃない。」

「じゃあ何故!」

「…ネギがここで教師になる、俺は、あのお人好しでドジなバカを見守りたい、ただそれだけだ。」

その言葉を聞き、学園長達は思った。

この子は優しいと。

龍臥は尚起きあがった。

こんな奴に負けられないと。

「君には負けない…ッ」

「…どうでもいい。」

フラフラと立ち上がる龍臥を見て、心底どうでもいいと言う顔をしながらため息をつく。
もう、終わらせよう。

弓を彼に向け、その弓の宝具の名を言う

「……森の恵みよ……圧政者の毒となれ……」

呟いた後、弓が光りはじめ先端から木の枝が生え、延びる。
延び続ける先に有る物は、龍臥。
枝が龍臥に当たり、消え去る。

「……祈りの弓……」
イー・パウ

宝具の名を口にした瞬間、龍臥から大樹が生え、一瞬で消える。
その時

「ガアアアアアアアアアアアアアアアア……!!」

龍臥の全身に激痛が走る。

先ほどのまでのダルさではない、体を引き裂かれたような痛み。

「ヴィッヴィンセント君？一体……」

高畑が何が起きたか聞き、ヴィンセントは説明する。

「こいつの体にある毒を増幅させました。…ほんの少量な。」
「そんな事、出来るわけ……」

無い、他の者も考えていたがヴィンセントは説明する。

「この弓の能力です、相手の体の中に毒がある場合、その毒の効果を上昇できます。この用にね。」

その効果に学園長達、エヴァンジェリンまでもが驚いた。そんな事を無視し、学園長に聞く。

「結果は俺の勝ち…学園長、帰っても良いですか？」

その後、龍臥の毒を抜き、学園長に帰って良いと許可を得たヴィンセントは翠屋に帰った。

第十一話 怒りへ翻弄（後書き）

後書きコーナー ヴインとネギと時々質問

ヴィン「よし、始めりました後書きコーナー。」

ネギ「では早速質問読むよ、えーっと…」

ネギ「竜華零さんからの質問。」

「命懸けの仕事に七万の給料は安すぎませんか？それともドル、ですか？ドラクマですか？」

「あー、そうだな。確かに七万は安いよな。でもアイツに食材費負担して貰ってるからあまり奴に頼りたくないんだ。だから七万にした。」

まあ後々変わるかも…因みに日本円だ」

ネギ「で、竜華零さんから第二の質問」

「シグナムさん達とヴィンはどっちが強いんですか？」

「あつちは経験と場数が違う、何年か前は学生だった俺が、騎士達にかなうわけがない。
つまり最弱だ。」

ネギ「次はルリさんからの質問。」

「ヴィンセントの実力が分からない。」

「まあそうだな、何時もはネギ以上高畑未満と考えてくれ。
鬼道や投影、変身など本気を出せば…本気エヴァと並ぶな。」

ネギ「質問はここまでだね。」

ヴィン「ああ、それと読者の方々に一言。最近リアルで忙しくなってきたらしい、何時も遅い更新がさらに遅くなる。」

ネギ「ごめんなさい！」

ヴィン・ネギ「次回もよろしくお願いします!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7865q/>

魔法先生ネギま！薬味先生の友達は転生者！？

2011年7月9日01時02分発行